長崎県文化財調査報告書　第197集

刎（はね）木（き）城跡

一般国道206号道路改良工事（小迎バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

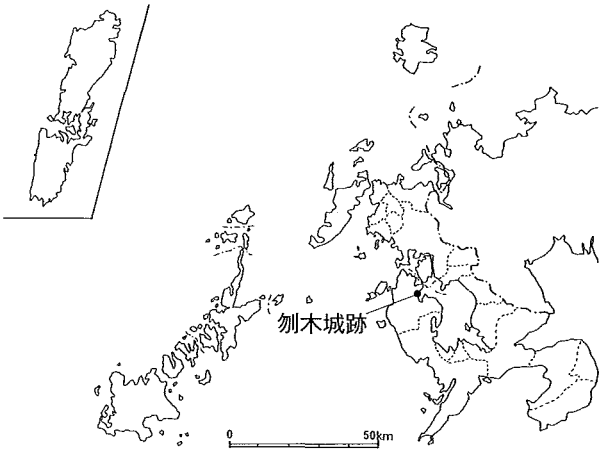
2008

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第197集

刎　木　城　跡

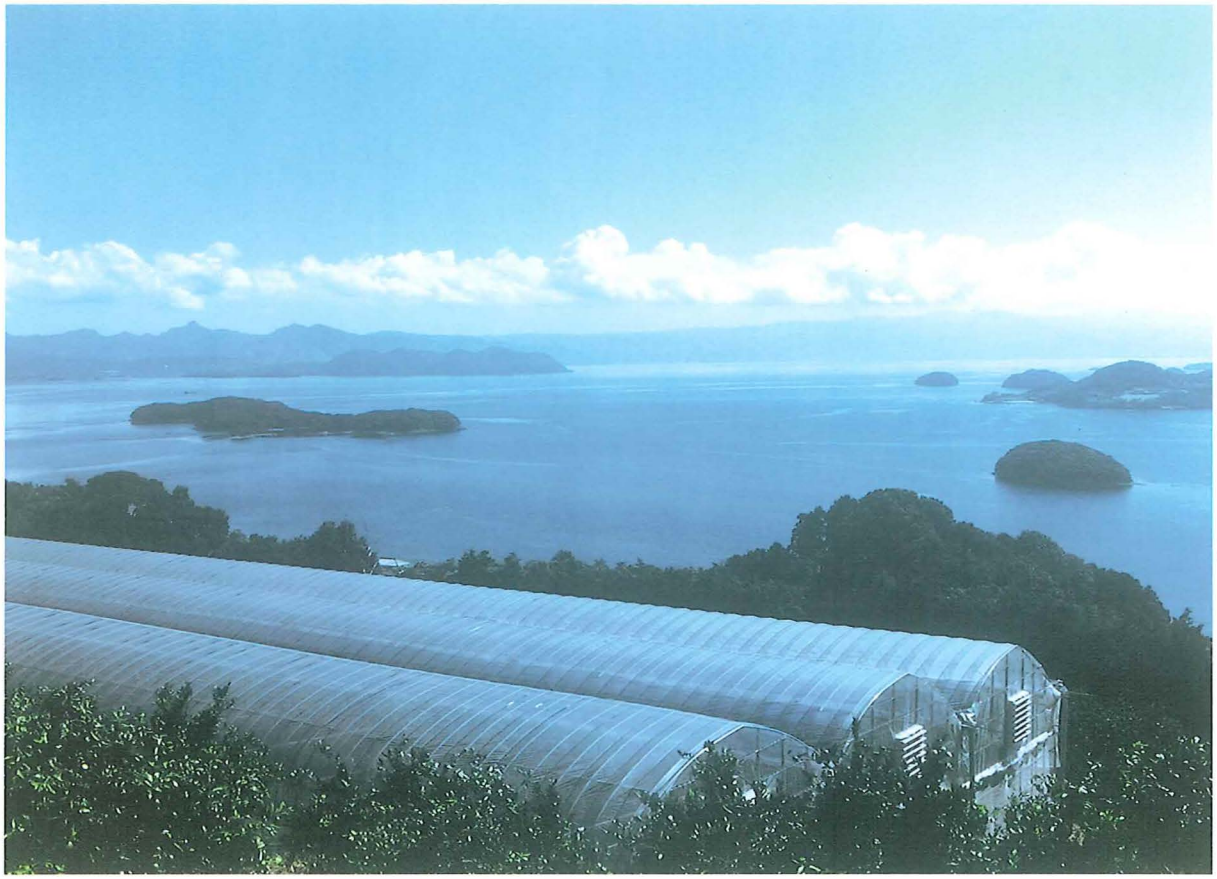
一般国道206号道路改良工事（小迎バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



２００８

長崎県教育委員会

刎木城跡近景



刎木城跡周辺から大村湾を望む

刎木城跡石垣

刎木城跡石組遺構

1号石組遺構

2号石組遺構

発刊にあたって

本書は、一般国道206号道路（小迎バイパス）改良工事に伴い長崎県教育委員会が実施した刎木城跡の発掘調査報告書です。

刎木城跡は、平成17年度に長崎県教育委員会が実施した中近世城館跡分布調査事業によりその位置や遺構が確認された城館であり、室町時代中ごろに築かれたと考えられています。

調査着手前の城館中心の小高い部分には、人工的に開かれた平場とそれを取り囲む石垣が確認されていましたが、発掘調査ではその下に刎木城が築かれたころの石組遺構や柱穴、貝を廃棄した遺構など、城館に関わる人々の生活の痕跡が発見されました。

これらの調査結果から、大村湾を中心とした漁業や海上運搬で活躍した人々が築いた城館の姿を見ることができました。

この調査成果が、これからの城郭調査研究の学術的資料として広く活用され、文化財の保存活用に役立つことができるよう念願いたします。

最後に、発掘調査の実施にあたり、御理解と御協力をいただいた地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成20年３月31日

長崎県教育委員会教育長

横田　修一郎

例　　言

1．本書は、一般国道206号道路改良工事に伴い実施した刎木城跡の発掘調査報告書である。

2．調査は長崎県教育委員会が主体となり、発掘調査業務に関しては㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託し、平成19年７月２日から９月21日にかけて実施した。

3．調査関係者は次のとおりである。

長崎県教育庁学芸文化課	文化財班	課　長　補　佐	古門　雅高
		主任文化財保護主事	福田　一志
		文化財保護主事	寺田　正剛（調査担当）
㈱埋蔵文化財サポートシステム		長崎支店長	山口　勝也
			野口　岩雄（調査担当）
			松崎　卓郎（調査担当）

4．本書で使用した地形測量、石垣の実測および製図、遺構の実測、空中写真については埋蔵文化財サポートシステムが行い、現場での写真撮影は寺田が行った。

また遺物の実測については、浜崎美加・成田万里・中村千春・野島愛子・頭島直美・福山留美・一瀬裕子・奥村清美・津田由紀・山本幸子が、トレースは横田愛子が、遺物写真撮影は寺田が行った。

5．本書に収録した遺物、写真、図面は長崎県教育庁学芸文化課資料整理室で保管している。

6．発掘調査から報告書作成に関して、以下の方々にご助言・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

吉田　浩（西海市教育委員会社会教育課長）、荒川康憲（　同　社会教育課文化班課長補佐）諏訪勝郎（　同　社会教育課文化班主査）、志田和子（　同　社会教育課西彼地区教育振興班課長補佐）、内海悌二（西彼町史談会）、永田留義（西彼町史談会）、山口　博（西彼町史談会）

7．本書の執筆・編集は、寺田が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の立地と環境 …… 1

Ⅱ　調査に至る経緯 …… 5

Ⅲ　調　　査

1　調査概要 …… 6

2　遺　　構 …… 8

(1)　主郭

(2)　石垣

(3)　柱穴

(4)　石組遺構

(5)　その他・遺構

3　遺　　物 …… 17

(1)　貿易陶磁器

(2)　国産陶磁器

(3)　瓦

(4)　滑石製品

(5)　指輪

(6)　石器

Ⅳ　ま　と　め …… 24

挿　図　目　次

第１図　刎木城跡位置図（１/20,000）……1
第２図　刎木城跡周辺中世城館跡位置図（１/150,000）……3
第３図　一般国道206号道路改良工事用地平面図（１/2,000）……5
第４図　調査区及びグリッド配置図（１/400）……6
第５図　刎木城跡遺構配置図（１/300）……7
第６図　刎木城跡石垣実測図（１/100）……9～10
第７図　刎木城跡主郭部分遺構配置図（１/150）……11
第８図　Ａ－３～Ｂ－３区　西壁土層図（１/60）……12
第９図　Ａ－２～Ｂ－２区　西壁土層図（１/60）……12
第10図　Ａ－２～３区　１号石組遺構（１/40）……13
第11図　Ｅ－１区　石垣断面図及び２号石組遺構（1/40）……14
第12図　Ｂ－２区　２号土壙（１/30）……15
第13図　Ｂ－２区　集石（１/30）……16
第14図　陶磁器(1)（貿易陶磁器）［１/２］……18
第15図　陶磁器(2)（国産磁器①）［１/２］……20
第16図　陶磁器(3)（国産磁器②）［１/２］……21
第17図　陶磁器(4)（国産陶器など）［１/２］……21
第18図　桟瓦［１/３］……22
第19図　滑石製品［１/３］……22
第20図　指輪［２/３］……23
第21図　石器［１/２］……23
第22図　刎木城跡縄張り図［１/2,000］……25

図　版　目　次

図版１　刎木城跡近景／刎木城跡から大村湾を望む／刎木城跡と白崎半島を望む
図版２　北東側石垣／北西側石垣／北側石垣断面状況
図版３　主郭部遺構検出状況／主郭部柱穴検出状況／柱穴内瓦出土状況
図版４　腰郭部柱穴検出状況／１号石組遺構①／１号石組遺構②
図版５　２号石組遺構及び貝層出土状況／２号石組遺構周辺遺物出土状況
図版６　出土遺物①
図版７　出土遺物②

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

刎木城跡は、西海市の北東部に位置し、標高約60mの丘陵上に立地する城館跡である。

刎木城跡の所在する西彼半島はさまざまな変成岩により形成される地層であるが、半島北部では主に結晶片岩や石英を基盤層としており、山側には切り立った岩盤を見ることができる。また、この結晶片岩と岩脈を隣にする滑石層が半島内の各地に露見しており、その切り立った岩盤やクラックには石鍋の削りだしの痕跡が観察される。このことからこの西彼半島は全国的にも有名な石鍋製作地として注目されている。

刎木城跡が立地する丘陵は玄武岩の岩盤を基盤としており、滑石の路頭は見られない。また、その周辺は赤褐色の粘土層が堆積しており、その中に黒曜石の散布が確認されている。刎木城跡のある高

第１図　刎木城跡位置図（１/20,000）

台に上がり遠方を望むと、大村湾の北部を一望することができる。対岸には川棚町の大崎半島、さらにその奥には多良山系の山々、南側に眼を転じると正面に白崎半島や四本堂公園があり、その付け根部分には旧オランダ村と鳥加川の河口を望むことができる。したがって、大村湾を行き交う船舶を監視することは容易であり、城館の機能の一つと考えられよう。

2．歴史的環境　～刎木城跡周辺の中世城館跡を中心として～（第２図）

前述したように、刎木城跡が立地する西彼半島北部は滑石層の露頭が多いことから各地で石鍋製作地が確認されている。したがってこの周辺に立地する城や館の周辺からは滑石製品が多く出土し、それらの遺跡が滑石製品の流通に大いに関係することは間違いないであろう。その交通路である大村湾を眼下に見渡すことのできる刎木城の存在は非常に大きい。

大村湾の北部は外海とつながる唯一の場所であり、交易を目的として湾内を通行する船舶は必ず航行する。逆に考えれば、外敵が海上を使って大村湾内に侵入する場合、この地域の監視が非常に重要である。したがって、この周辺には約14ヶ所余りの城館が集中しており、その役割を果たしている（第２図）。これらの城館について概観してみる(註1)。

１～３は早岐瀬戸沿いに位置する城跡である。１は広田城跡である。平戸松浦氏が大村氏に対して設けた番城であり、16世紀後半の大村氏との攻防の際も攻略されなかった。遺構としては南側斜面に10本の竪堀を配し、東側に３本、北側に１本の掘切で防御されている。また、主郭には土塁と石塁がめぐり、平入りの枡形虎口が確認される。このような強固な遺構を有する城郭は非常に珍しく、重要な遺跡といえよう。２は大刀洗城跡である。文献や伝承はなく、小規模で馬蹄形状空堀と土塁を備えている。３は指方城跡である。指方氏は平安末期から続く系譜であり、戦国時代には大村氏に、16世紀の後半ごろは後藤氏・平戸松浦氏に加わっている。遺構としては南側に２本の空堀、北側に石垣を持つ張り出し部が作られている。

４は針尾城跡である。平成16年、佐世保市教育委員会により発掘調査が実施され、掘立柱建物跡が検出されたほか、多くの中国陶磁器が出土している。主郭は東西50m×南北60mのほぼ円形で、深さ約2.5m、幅約４mの二重の空堀と土塁により形成されている。

５・６は面高港沿いの城跡である。５は梅崎城跡である。関係文献等はないが、頂部には明瞭な平場を持ち、一段下に腰曲輪がみられ、土塁状の高まりが一部残る。６は天崎城跡である。面高湾に突出した岬の先端を利用しており、岬の基部を掘り切り尾根筋に段差を設けて曲輪となす程度で大規模な造成は行われていない。平場は岩や岩盤が露出しており、南北は急崖となっている。

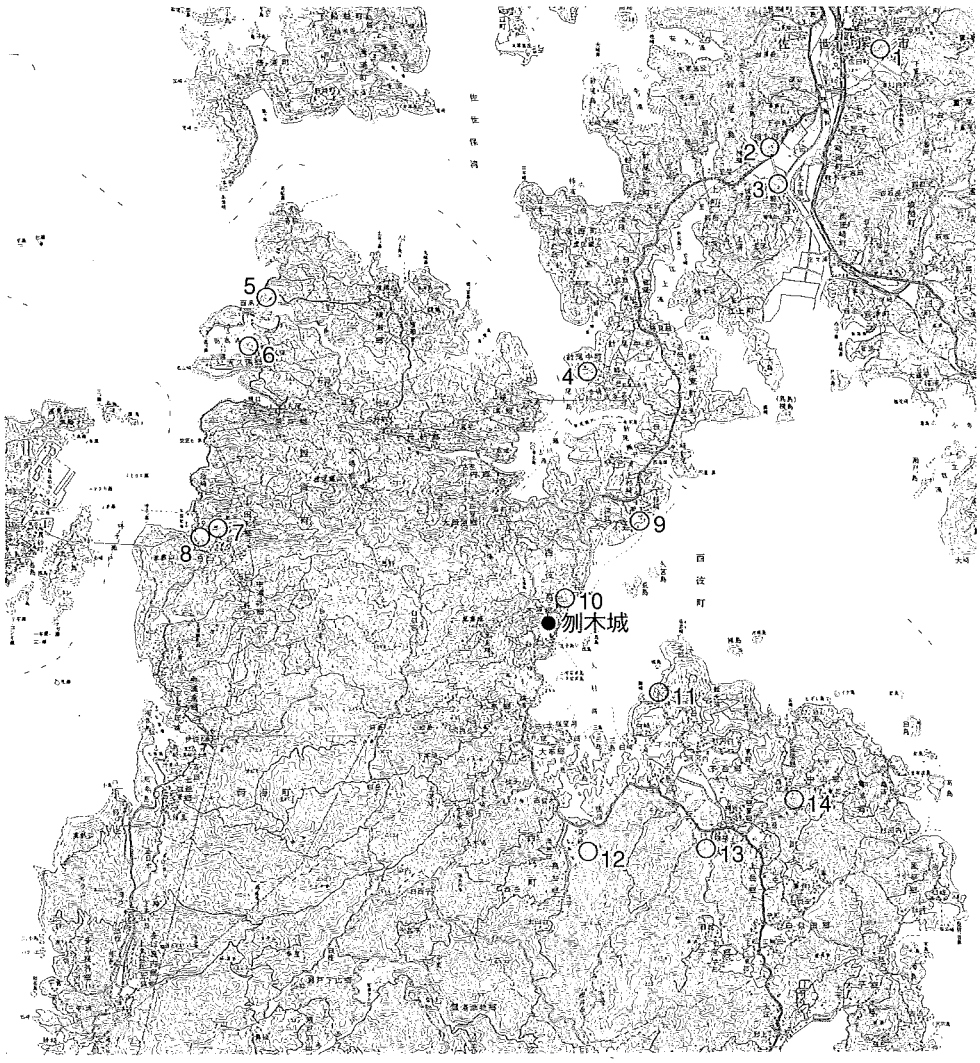
７・８は太田和港に隣接する位置の城館であり、７は太田和氏館跡、８は下り山城跡である。太田和氏館跡は山側に明瞭な馬蹄形の土塁と空堀を有し、遺構の残りは比較的良い。また、２本の掘切があり、そのうち１本は竪堀と連続している。小規模であるが遺構の残りは良く、一部に石垣が見られる。

９～14は大村湾沿いに位置する中世の城館である。９は天狗山城跡である。文献資料には出てこないが、大村藩の家老稲田氏の旧宅の背面に隣接することから大村氏との関係が推測される。頂部付近に馬蹄形の小規模な空堀と土塁からなり、その外側の腰曲輪には直径約２m程の円形の土壙が等間隔に配置されており、砲撃に利用されたとの言い伝えが残っている。10は城明城であり、以前はヤボサ

遺跡と言われていた。丘陵の先端を空堀で寸断し曲輪を形成しているが、ミカン畑の開墾の際空堀の一部は埋められたと考えられる。また主郭の部分には矢房権現（やふさごんげん）を祀った祠が鎮座している。刎木城跡の出城という考えもある。**11**は膝行神（いざりかみ）貝塚である。刎木城の海を隔てた南東側対岸部に位置し、平成16年に西彼町教育委員会（現西海市教育委員会）が発掘調査を実施している。調査では、掘立柱建物跡や貝層が検出され、滑石製品を中心に中世の遺物が出土している。**12**は鳥加城跡である。丘陵の頂部を二段に造成し、周囲に高さ1.5～2.0mほどの石垣が巡っている。鳥加川流域に位置しており、その上流には石鍋製作跡があることから石鍋の積み出しに関する性格を有する城館と考えられる。北から北西側は急崖で、結晶片岩に穴を穿った板石が突き出ており、旗竿石と言われている。**13**は八幡山城跡である。喰場八幡宮の背後にある城館で、大明寺川流域に面した東側は急斜面で西側が緩斜面となる。丘陵頂部は平坦になっており、掘切や竪堀が残る。また、主郭の西側には高さ１m程の石垣が一部に残存する。**14**は中山郷に所在する城の山古城である。中山川が二股に分岐する場所の山上にあり、小字名として「字城の尾」という地名が残る。北東側尾根に２本の掘切と、西側尾根には帯曲輪・腰曲輪などが付属している。曲輪は平面でその周囲には高さ0.5～0.6cmの石垣が巡っている。

これらの城館の特色をまとめると次の事が言えよう。

まず一つめは、近くに大きな河川の流域や港を有することである。ここに掲載した城館のほとんどが水辺からの進入路が考えられており、海上を交通路とすることが想定される。海上運搬はもとより、海賊行為を容易に行いやすい良港と見張り台という組み合わせがこの地域の特徴であろう。



第２図　刎木城跡周辺中世城館跡位置図（１/150,000）

二つめは、

石垣を有する城館が多いことである。一般的に城郭に石垣が築かれるのは織豊期以降と考えられているが、長崎県内では室町時代中頃から随所に見られるようになる。これは、防御を中心に考えられたものというよりも、山かちな地形であるため広い平場が確保されず、埋め立て造成により平場を形成し、その縁辺を石垣で保護し崩落を防いでいるということが考えられる。石垣に利用しやすい結晶片岩や板状の玄武岩が比較的入手しやすいこともその要因ではないだろうか。

3.『大村郷村記』に見られる刎木城跡

江戸時代後期に大村藩によりまとめられた『大村郷村記』(註2)には刎木城について、次のような記録がある。

「　一　刎木の古城

荘屋より子の方六町餘刎木と云處にあり、元祿の記に高一壹町程、本丸廣サ五畝程、石垣高サ五尺又は六尺、廻り百間餘、大手南向石垣長貳拾間、高サ五尺程、此城東は海、西は嶮岨なり、水の手北の方にあり、此城時代・由緒不知、今は野原なりと云々、當時は都て畠なり、頂上畠中に壹間方位の塚あり、昔の城蹟をあらわせしものか、此處より南の方壹町餘の處に松山あり、此處に刎木の城主志田三郎儀憲の墓と云傳へ古墓あり、壹間方位の塚あり、温石の石塔數々あり、一塔の銘に在志趣者三從公禪尼、應仁三天巳（丑）二月彼岸中日とあり、右塚の上に弘化三丙午年八月、朝川悅右衛門頼典・北嶋順右衛門尚俊、石祠建立」

この記録では、本丸（主郭）の広さは約500㎡、石垣の高さは1.5～1.8m、廻り約180mとあり、大手は南側にあるという。城の東側は海で、西はけわしい傾斜地であり、水が入手しやすいところが北側にある。また、城の中心部の畑の中に1.8m四方の高まりがあったという。

これらの記録から判断して、「刎木の古城」跡がこの位置であることは間違いないと思われる。また、石垣の高さや長さについては現存する石垣とほぼ同じ規模であり、記録にある刎木城跡の遺構の可能性が強かった。したがって、平成17年に実施した中近世城館跡分布調査事業での悉皆調査の際、「刎木城跡」として判断され、遺跡の周知が行われている。

刎木城の南側に「志田三郎」の古墓があり、周辺に温石（滑石）の石塔が数基ある。そのひとつに応仁３（1469）年の銘があり、刎木城造営時期の目安となっている。また記録の最後に弘化３（1847）年の石祠建立についての記述があることから、この郷村記の記録が江戸時代後期ごろの状況を表したものと推測される。

現在は、社の裏側に石塔群が平積みにされて地区の人々により保存されている。また社の入り口付近には径が50㎝程の未製品の石鍋が据えられており、刎木城との関係が伺われる。

（註１）刎木城跡周辺の中世城館跡の状況については、平成17・18年度に長崎県教育委員会実施した中近世城館跡分布調査事業により、本田秀樹氏（現長崎県立北高等学校教諭）がまとめたものを引用させていただいた。

（註２）原文は『大村郷村記』「第五十　八木原村」藤野保編　国書刊行会（1982）より引用し、『西彼町郷土誌』「第Ⅶ部　各郷の歴史　第三章　八木原郷の歴史」西彼町教育委員会（2003）を参考にした。

Ⅱ　調査に至る経緯

刎木城跡が、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されたのは、平成17年度の長崎県中近世城館跡分布調査事業の悉皆調査によるものである。もともと、当該地は地元住民の中で「刎木の古城」としての伝承があったが、前述の事業により「大村郷村記」に見られる規模の石垣などが確認されたことから、その場所が確定されたところである。

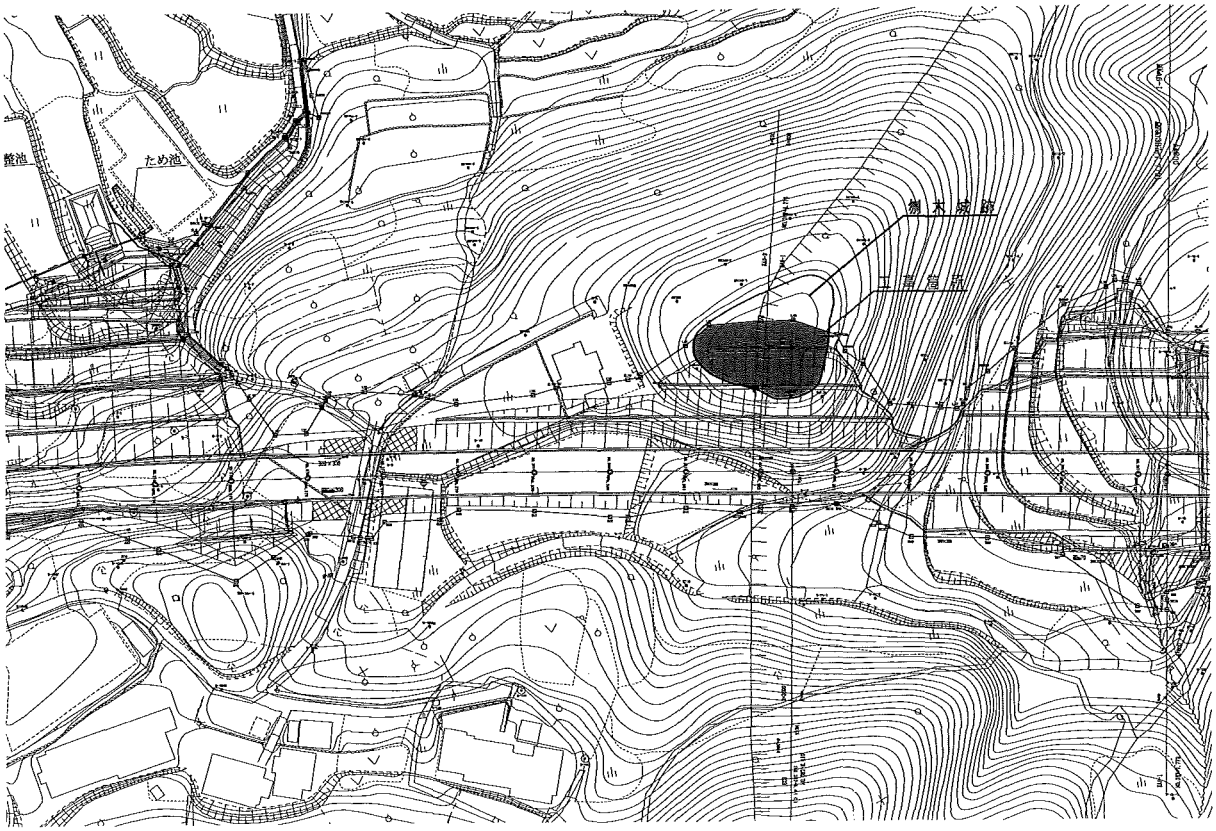
平成18年２月の悉皆調査の際、現地を踏査した職員が工事用の幅杭が打たれていたことを確認し、西彼町教育委員会（現在の西海市教育委員会）に問い合わせたところ、一般国道206号道路改良工事（小迎バイパス）の路線内であることが判明した。路線の中心部は遺跡西側の谷部を通るが、道路東側の土端部分が刎木城跡にかかることとなった。（第３図）

事業課である長崎県大瀬戸土木事務所と幾度となく協議を重ね、可能な限りの遺跡保存を検討したが、安全面等の配慮から工事の回避は難しく、当初の予定面積から変更した約384㎡について調査を実施することとした。

その後、平成19年３月、発掘調査に先立ち主郭周辺の約2,500㎡の地形測量を実施している。その際、平場を一周する石垣と南側に階段状の平場が確認された。また主郭の西側には腰郭輪状の突出部があり、さらにその西側は急激な傾斜地となっていることが明らかとなった。

今年度の調査に際しては、現場棟と駐車場、排土置き場、作業用道路の造成を行った後、主郭部分を中心として発掘調査を実施した。

調査は、平成19年７月２日から９月21日まで実施した。

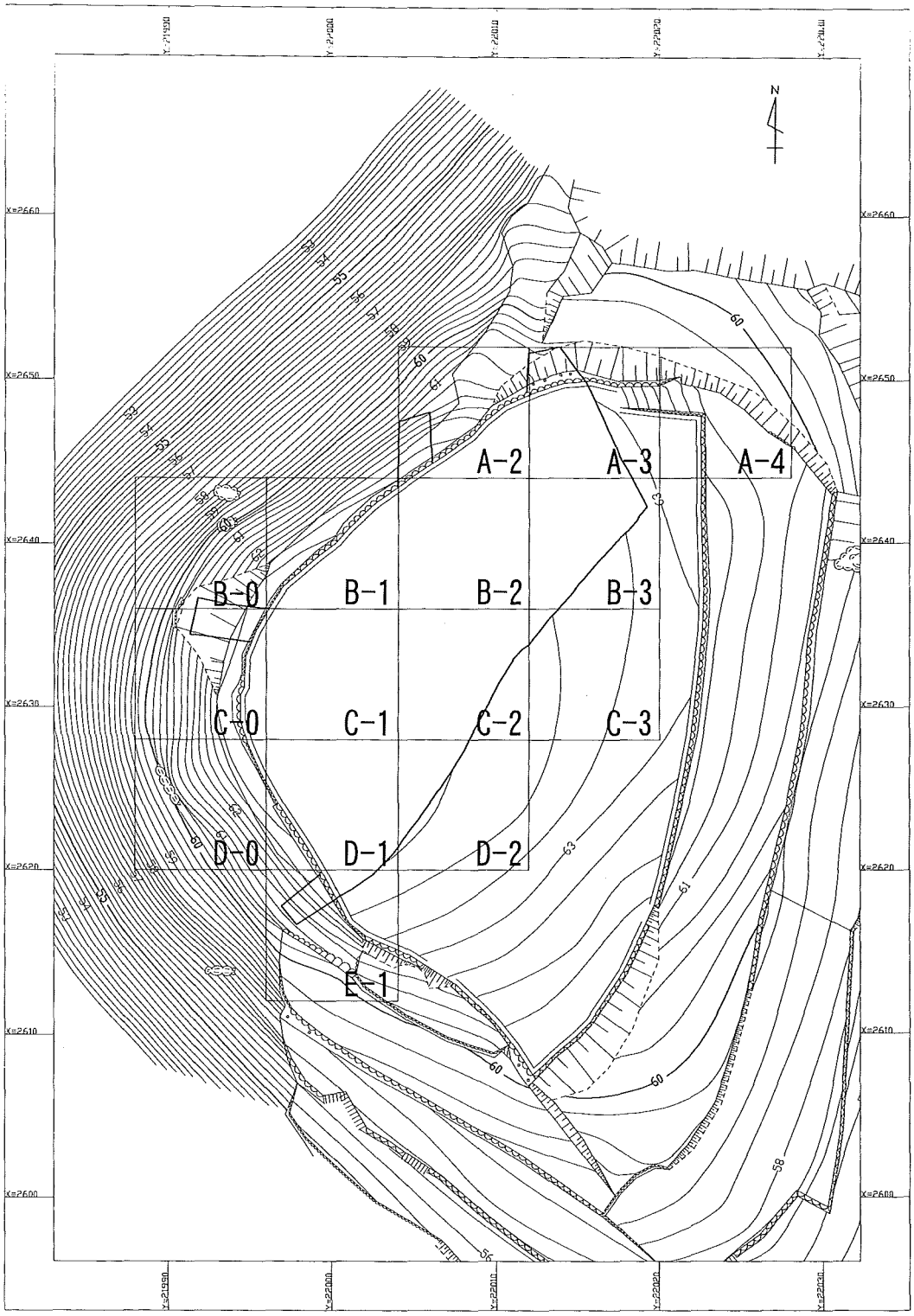


第３図　一般国道206号道路改良工事用地平面図（１/2,000）

Ⅲ 調　　査

1．調査概要

調査区域は、主郭部分に座標軸からグリッドを設定し、北からＡ・Ｂ…、西から０・１…と付号した。また石垣の断ち割りと主郭周辺の遺構確認のため４ヶ所にトレンチを設定した（第４図）。

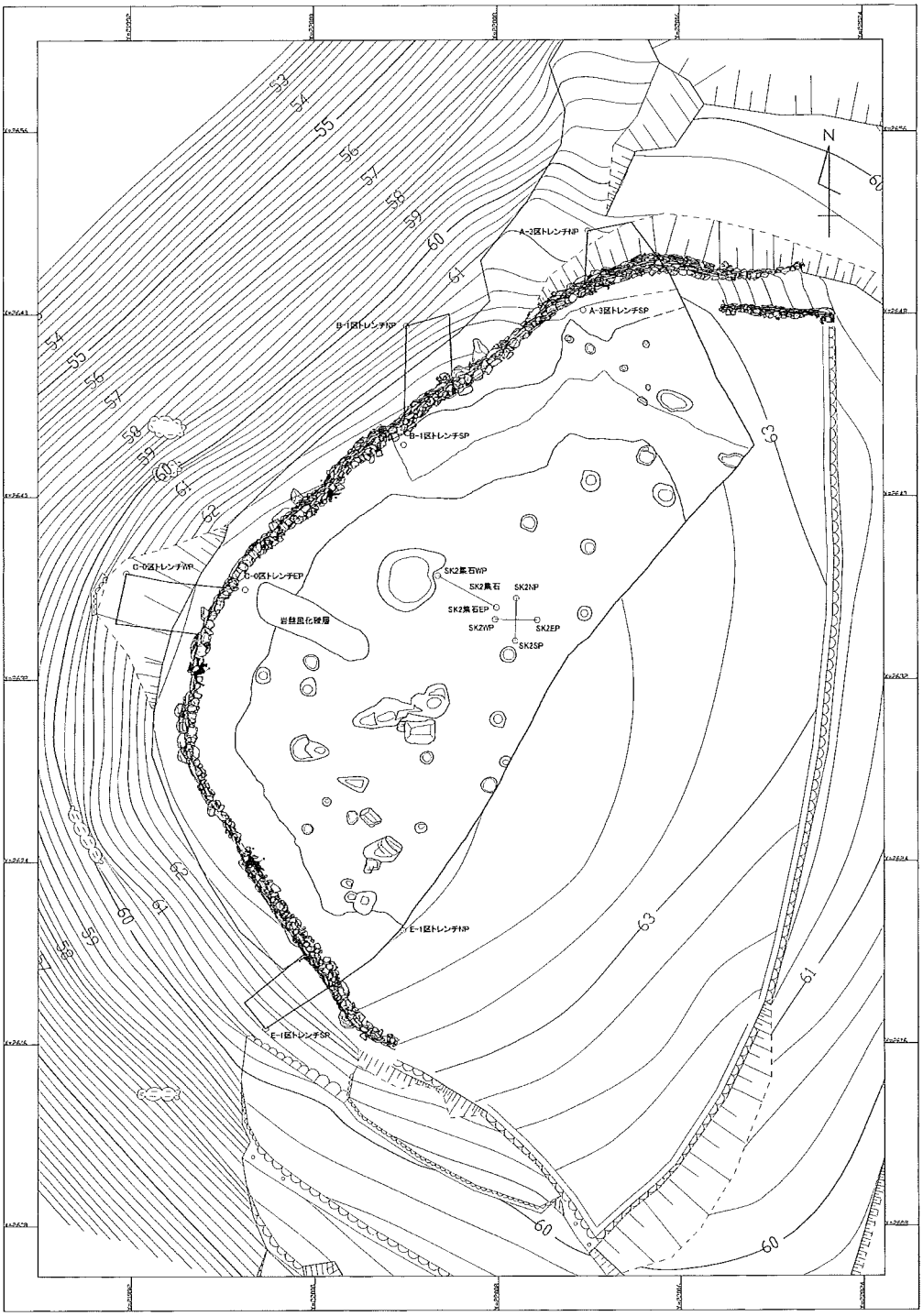


第４図　調査区及びグリッド配置図（１/400）

発掘調査は、まず主郭のほぼ中央部に東西方向のトレンチを設定し、遺構のあり方や掘削土の深さを確認した後、南側の調査区から順次掘り下げを行った。また、現存する石垣部分については可能な限り石材を除去し遺構の確認を行った。

調査の結果、主郭部分から径約70cmの柱穴が数ヶ所、土壙４基、集石遺構１基を検出した。

また、石垣を外した２ヶ所のトレンチ（Ａ－３区・Ｅ－１区）の下からは石組遺構が確認され、その石組遺構の間には貝殻の散布が見られた。また、Ａ－２～３区では主郭部分とは明らかに異なる径20cm程の小ピットが確認されている。



第５図　刎木城跡遺構配置図（１/300）

基本的な土層は、１層が表土、２層は赤褐色角礫混在造成土、３層は黒褐色土、４層は暗褐色土、５層は黄灰色風化礫および岩盤で、３層に中世および近世の遺物が、４層に中世の遺物が出土している。１層の表土は約10㎝程度と非常に薄く、２層は主郭中心から周辺部にかけて厚く堆積する。また、３・４層は主郭中心部には見られないが、周辺部の現存する石垣の下層に堆積が確認された。

主な出土遺物としては、中世の貿易陶磁器、滑石製品、近世の国産陶磁器・瓦・指輪などがある。

２．遺　　構

⑴ 主　　郭（第５・７図）

主郭部分の面積は約600㎡で、周囲には石垣が巡っている。北東側に主郭への導入部があり、南側には階段状の平場が確認される。主部の形状は西側に弧をもつ半円形であり、東側は直線的である。主郭の上面は平坦であるが、南東へ向けて若干傾斜している。

調査はこのうちの約300㎡について実施した。その結果、径が60～70㎝の柱穴が約20ヶ所、土壙が４基、集石遺構が１基検出された。

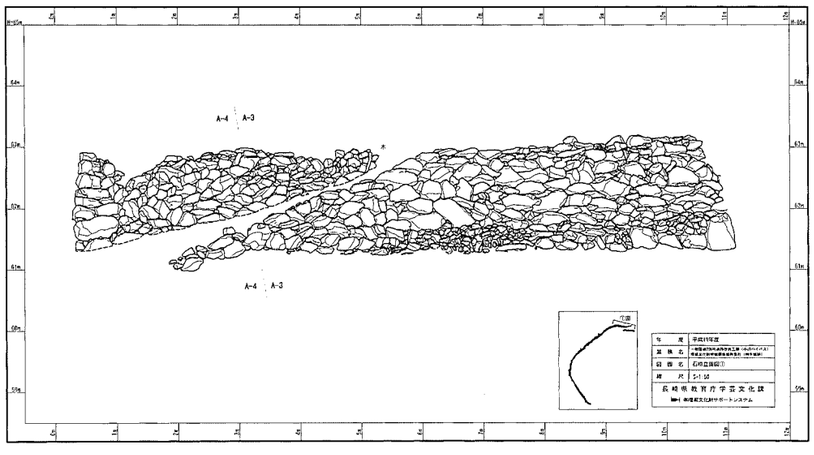
柱穴は主郭平場の全面に確認されており、径が大きく表土が浅いため、地表の落ち込みからでも柱穴の有無が確認されるほどである。その配置から判断すると、桁間が約４ｍ、梁間が約5.5ｍの大型の建物が予想され、建物の向きとしては北東から南西の方位をとると考えられる。その方位は北西側の石垣の向きとほぼ平行しており、石垣と建物が同時期に構築されたことが伺われる。

調査を進めるにつれて、現在の主郭の平場がどのような時期にどのような方法で行われたかが判断できた。Ａ－３～Ｂ－３区の掘り下げを行ったところ、現在の平場が形成される以前の旧地形の堆積土（基本層序３・４層）が確認された。この堆積土は平場の周辺部に限って確認されており、この旧地形を埋め立てて平場を形成し周縁部に石垣を築き上げている。埋め立ての時期を出土遺物から判断すると、３層の黒褐色土から江戸時代後期の陶磁器と中世の陶磁器が、４層の暗褐色土から中世の陶磁器等の遺物が出土している。つまり、現存した平場や石垣の造成は少なくとも江戸時代後期以降に行われたものであり、刎木城が営まれた当時の遺構ではないことが確認された。

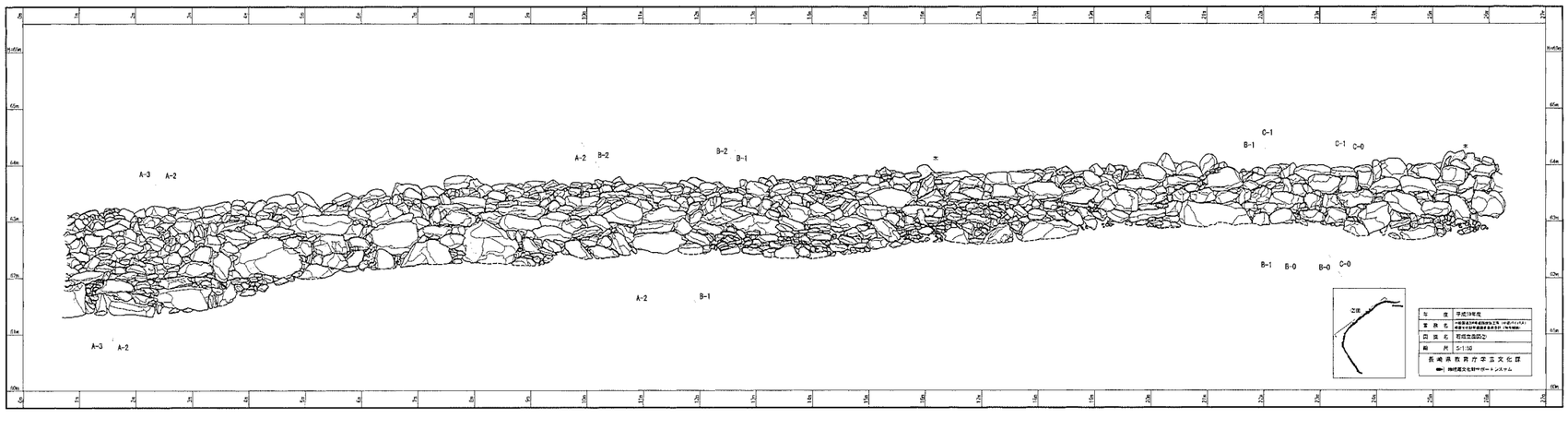
⑵ 石　　垣（第６図）

現存する石垣は、主郭の周辺部を一周して構築されている。主郭の西側の石垣は地形の等高線に沿って配置されており、その長さは北西部で約25ｍ、南西部で約18ｍ、両者ともほぼ直線であり、繋ぎの部分は角をつくることなく丸くおさめられている。石垣の高さは北側が約1.8ｍ、南に移行するにつれて約1.5ｍと低くなっている。これは石垣を積み上げるもともとの地形が北から南に向けて徐々に高くなることによる。この石垣の高さは、「大村郷村記」の記録の数値とほぼ同じであり、当初この石垣が記録に残るものであるとの判断された。

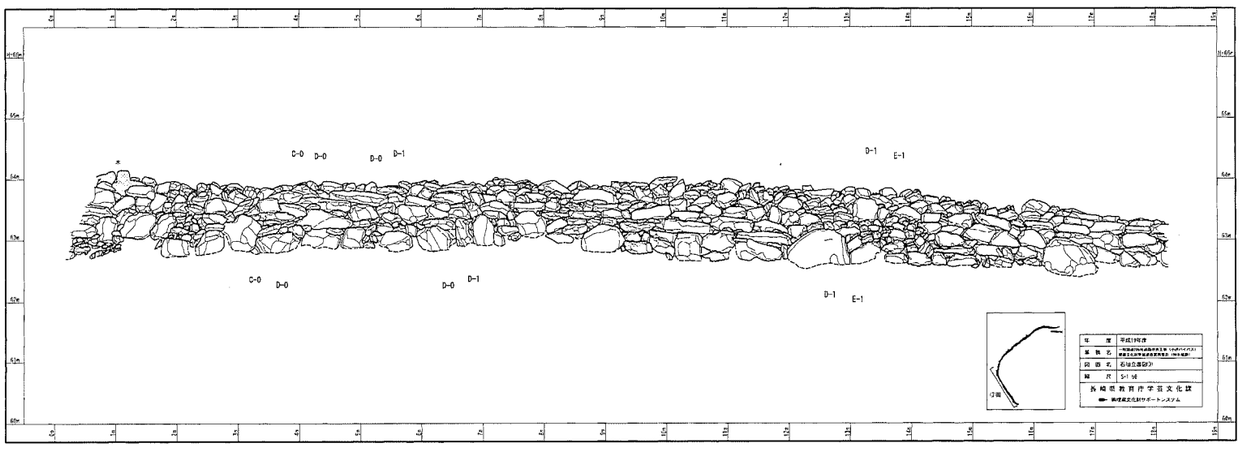
石垣の石材は地元で入手可能な玄武岩であり、一部結晶片岩や花崗岩などが見られる。玄武岩の石材は径が50～80㎝程の角礫が多く、風化により破砕しているものも見受けられる。石垣の積み方は、角礫が多いことから礫と礫の間に隙間が多く、安定感に欠く。ただ、南側の石垣の積み方には規則性があり、径１ｍほどの比較的大きな玄武岩の角礫を等間隔に配置し、その間の基礎部分には板状の石材を積み上げ、その上にその他の角礫が無造作に積み上げられている。



北側石垣

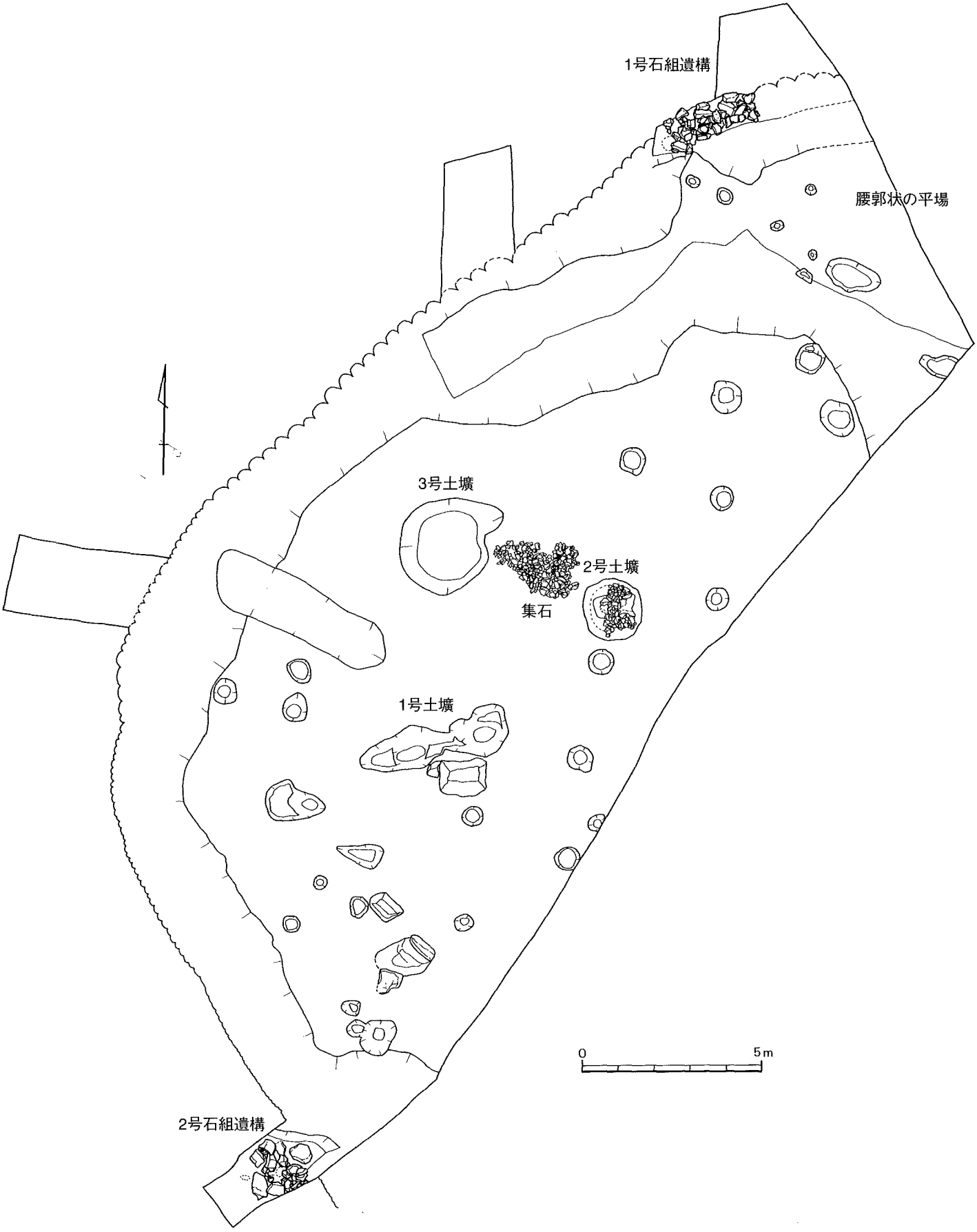


北西側石垣

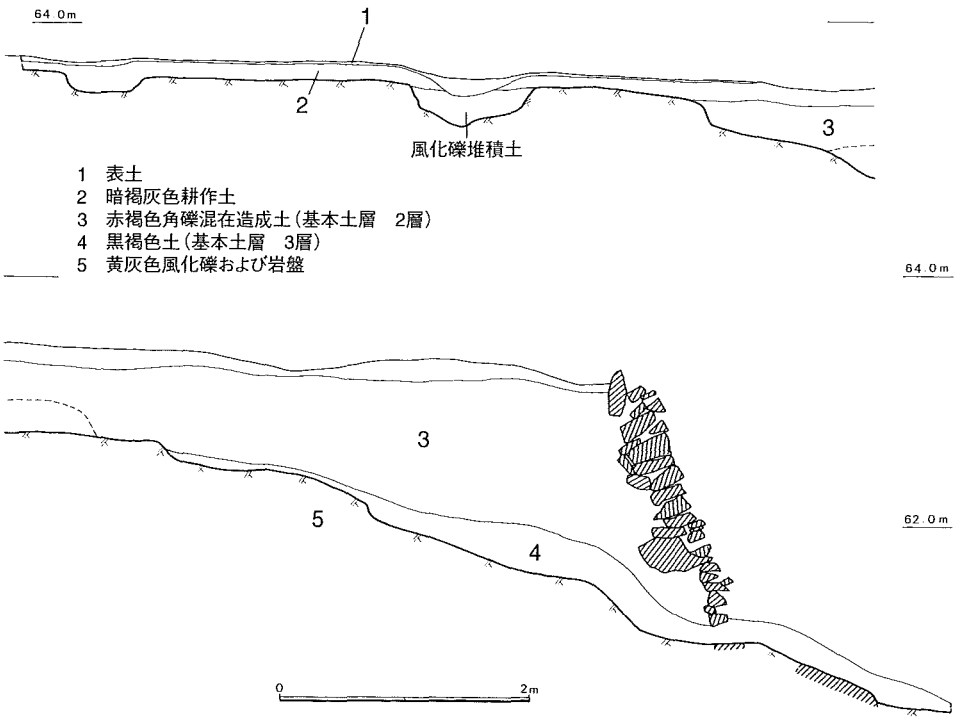


南西側石垣

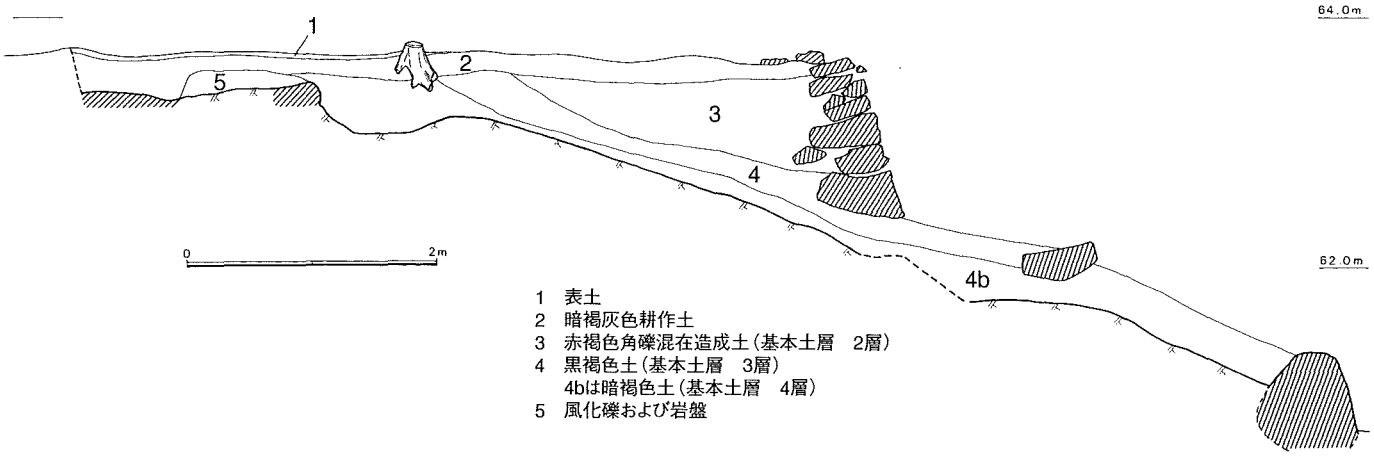
第６図　刎木城跡石垣実測図（１/100）



第７図　刎木城跡主郭部分遺構配置図（１/150）



第8図　A－3～B－3区　西壁土層図（1/60）



第9図　A－2～B－2区　西壁土層図（1/60）

北側の主郭への導入部では、主郭へ上る傾斜地があり、その外側に石垣が配置されている。但し、その斜面は石垣の築き直しの痕跡が見られることから比較的新しい構築物と考えられる。おそらく、主郭部の平場を後世に利用する際に出入りが容易にできるように築かれたものであろう。

石垣の断面の状況を観察するために4ヶ所のサブトレンチを設置し、断ち割りを行った。

A－3区トレンチ（第8図）では、南から北に傾斜する地形の上に約1.8mの高さに石垣を築き平場の造成を行っている状況が確認された。利用された石材は比較的小さく、石と石との間にも隙間が見られ不安定なつくりである。また、石垣の内側周辺部には立石が配置されていた。

A－2区トレンチ（第9図）では、A－3区トレンチ同様、北に傾斜する旧地形の上に約1.5mの高さの石垣が築かれている。この周辺の石垣は径1.0m以上の大型の根石が据えられ、その上に比較的隙間がない状態で積み石が行われている。

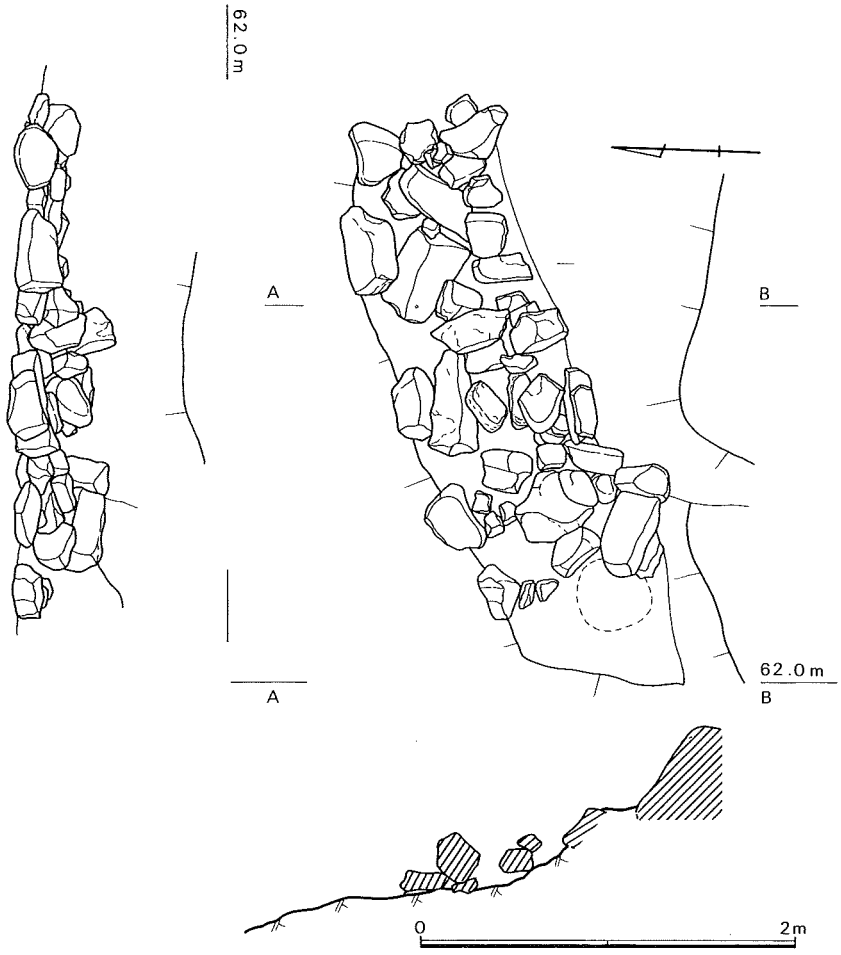
Ｃ－０区トレンチでは、西に傾斜する岩盤の上に径0.8m程の礫石が積み上げられている。当初、石垣の西側に腰郭が予想されたため断ち割りを行ったが、平場の削りだしなどの遺構は確認されず自然の地形と判断された。

Ｅ－１区トレンチ（第11図）では、他の石垣に比べ比較的にまっすぐに石が積み上げられており、隙間もほとんど見られない丁寧な技法が見受けられる。また、その下にさらに古い時代の石組遺構が検出された。

(3) 柱　　穴（第７図）

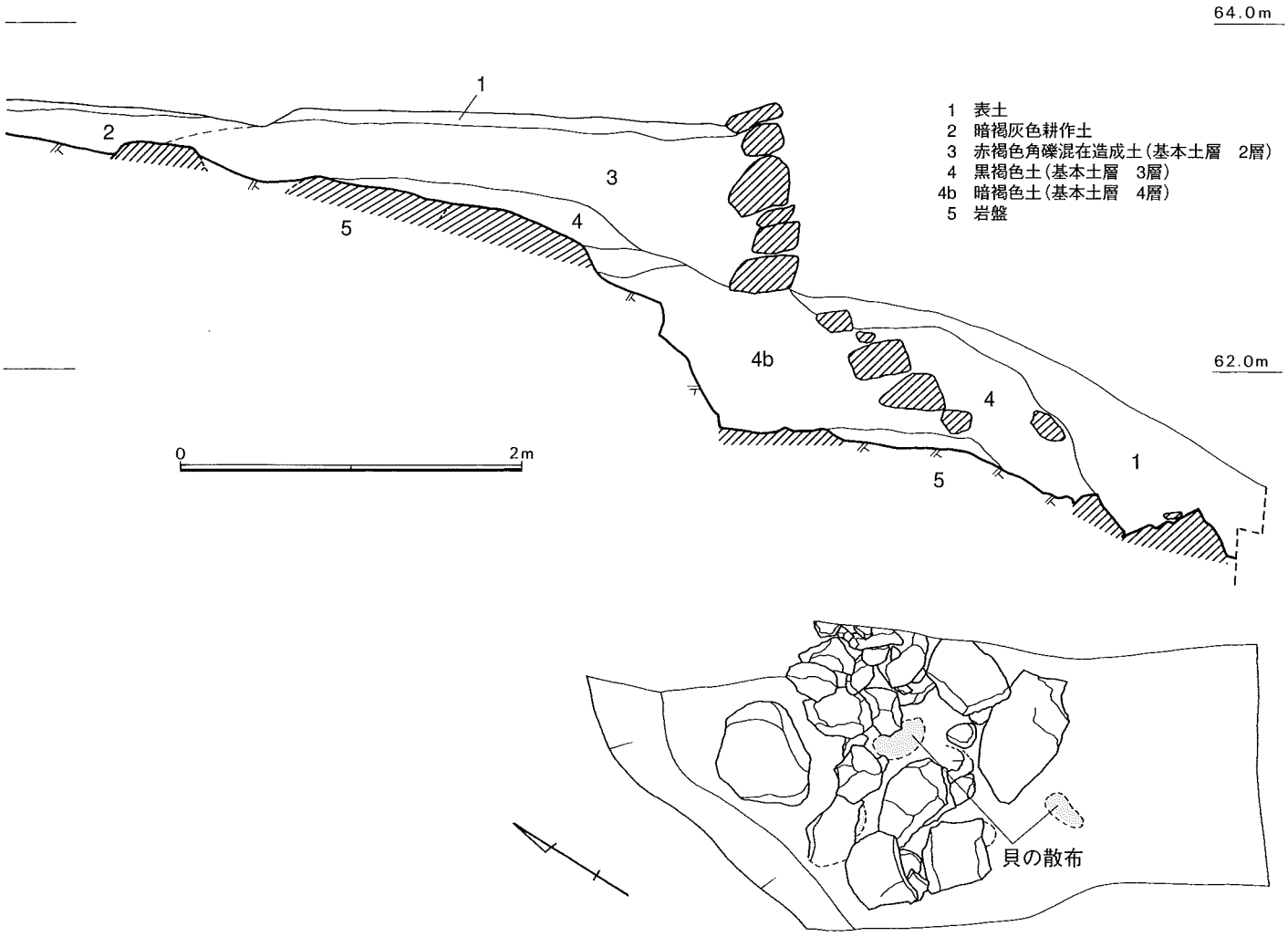
柱穴は、主郭部に径60～70cm程の比較的規模の大きいものが約20ヶ所検出され、主郭北側部分の腰郭状の平場部分に径20cm程のものが５ヶ所検出されている。

主郭部分の柱穴は、前述したようにその位置が表土上から確認されるほど掘り方が明確であり、ほとんどが岩盤を掘り込んだ状況で確認されている。北東から南西にかけての方向で並びが確認されるが、建物が復元されるほどの明確な柱穴列は確認されなかった。石垣と同様に現存する平場と同時期に築かれたものであることから、少なくとも江戸時代後期以降の時期と推測され、刎木城当時の遺構とは考えられない。それを裏付けるように、Ｃ－２区の柱穴跡から巴文を有する桟瓦の丸瓦頭部が出土している。



第10図　Ａ－２～３区　１号石組遺構（1/40）

主郭北側の腰郭状の平場に５ヶ所の小柱穴と土壙状のピット２ヶ所が検出された。いずれも岩盤に掘り込まれており、立ち上がりは明確である。柱の間隔はまちまちであるが、北西から南東にかけて列状に配置され、南東から２つ目の柱穴の北側に柱穴が１つ配置されている。いずれも平場の造成土の下にある江戸時代後期ごろの旧地形堆積土の下にあり、北西側の延長上に石組遺構が確認されていることから、刎木城当時の遺構の可能性が強く、主郭から腰郭に至る入口に付随する施設と考えられる。



第11図　E－1区　石垣断面図及び2号石組遺構　(1/40)

(4) **石組遺構**（第10・11図）

ここでいう石組遺構とは、石垣ほど明瞭な石の積み上げは見られないものの、人為的な石の積み上げが観察される遺構を指す。石組遺構はA－3区トレンチとE－1区トレンチから検出された。いずれも石垣の石材とは異なり、人頭大ほどの円礫が使用されている。

A－3区トレンチから検出された1号石組遺構（第10図）は、東西の長さ約3m、幅約1mである。現存した石垣を取りはずし、造成土と江戸時代後期頃の旧地形の耕作土を掘り下げた後に現れた遺構である。石の配置は不均整ではあるが、腰郭状の平場の北へ傾斜する地形の縁辺部に築かれており、部分的に石の積み上げが観察される。石材はほぼ同じ大きさであり、主に主軸を南北に向けて配置されている。石をはずすと中に二枚貝の分布が見られた。また、石組内側の埋土から瓦質の鉢（奈良火鉢）が出土している。これらの出土遺物からこの石組が刎木城跡の遺構の一部である可能性が強く、瓦質土器の時代から室町時代後期が推測される。

E－1区トレンチから検出された2号石組遺構（第11図）は、幅約2mで、残存する長さは調査区外へのびるため不明である。第11図の石垣の断面図に見るように、現存する石垣を取り外した後に検出された遺構であり、石垣とは明らかに伴わないことが判断される。層位から観察すると、南に傾斜

する岩盤の上に盛土があり、その周辺部に野面積み状の石積みが確認された。

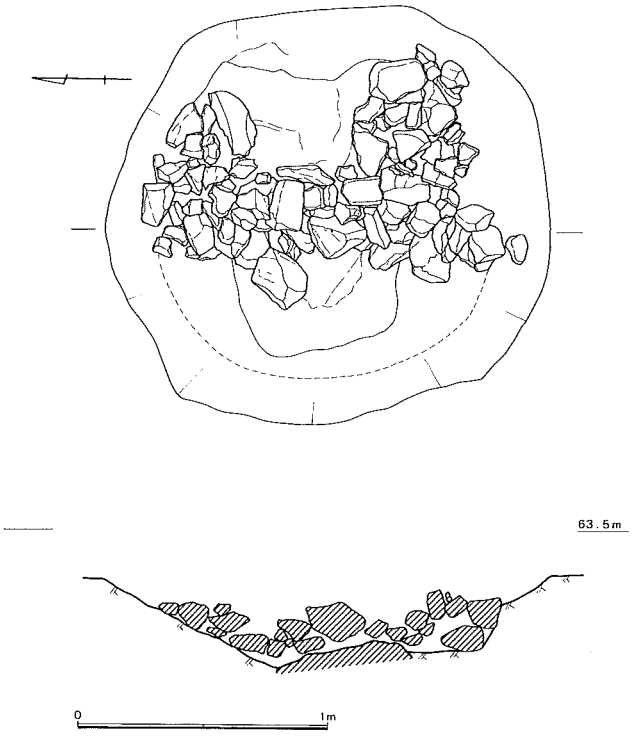
１号石組遺構同様、石組と埋土の下からは部分的に貝層が確認された。貝層の二枚貝はほとんどがアコヤ貝で、その他、カキや獣骨がわずかに混在する。アコヤ貝は現在でも大村湾沿岸で真珠養殖の母貝として利用されており、食用としても容易に入手されるものである。この貝層が確認されたことにより、生活の痕跡の証しとなり、刎木城が存在した根拠となりうる。また、石組遺構の内外から、中国南部福建省の芭蕉葉文を有する青花碗や中国製船徳利、滑石製品など16世紀初頭ごろの遺物が出土しており、この遺構が刎木城当時のものであるという可能性が非常に強い。幸いにも２号石組遺構の主体部は東側の調査区外に広がっており、保存されることとなっている。『大村郷村記』の記録の中にある刎木城南側の大手（入口）の解明は次回の機会に期待できよう。

(5) その他の遺構

現存する主郭の平場部分に土壙３ヶ所、集石遺構１ヶ所が検出された。いずれも遺構の中からの遺物の出土はなく、時期は明確ではない。

１号土壙（第７図）は、Ｃ－１・２区にまたがって検出された遺構であり、規模の大きな２つの柱穴が連結したような形状をしている。東西の長さ約４ｍ、南北の幅約1.1ｍで、深さは0.8～1.0ｍ程である。土壙の中には拳大の角礫が充填しており、その上に褐色土が覆っている。遺構の性格は不明である。

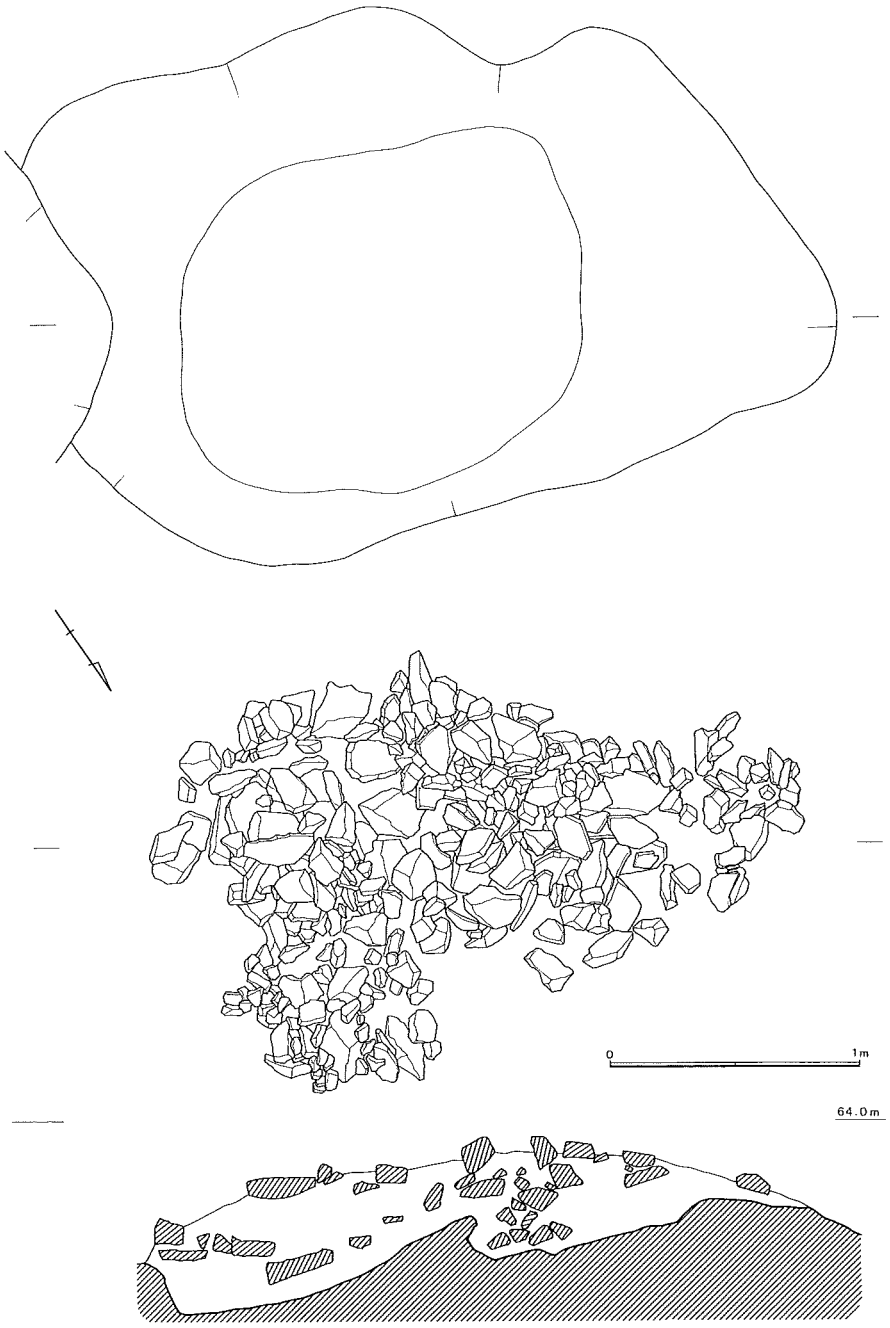
２号土壙（第12図）は、主郭のほぼ中央部のＣ－２区に検出された遺構である。調査の開始直後に設置した中央トレンチで確認され、掘り方の状況を確認するために半裁を行ったところ、１号土壙と同様に拳大の角礫が充填していた。南北約1.8ｍ、東西約1.7ｍの円形に近い形状であり、深さは約0.3ｍでレンズ状の掘り方をしており、床面には玄武岩の露頭が見られる。



第12図　Ｂ－２区　２号土壙（1/30）

３号土壙は、集石遺構の西側に位置する大型の遺構であり、Ｂ－１・２区にかかり検出された。南北約2.5ｍ、東西約2.5ｍのほぼ円形に近い形状であるが、遺構のプランは不明瞭であり、岩盤の風化礫が堆積した埋土である。同様な遺構が３号土壙の南西にあり、人為的な掘り方というよりも自然剥離的により生じた遺構である可能性が強い。

集石は（第13図）Ｂ－２・Ｃ－２区にまたがって検出された遺構であり、主郭平場のほぼ中心部に位置する。東西の長さ約2.6ｍ、南北の幅約1.6ｍで、積み石状に高まりをもつ集石である。集石の石材は拳大の玄武岩角礫であり、ほぼ均一



第13図　B－2区　集石（1/30）

した大きさである。礫を取り外すと下に土壙が検出された。土壙の規模は東西約3.2m、南北約2.3m、深さ約0.2mであり、集石よりもひと回り大きい。土壙の床面には玄武岩の岩盤が露出しており、掘り込みは見られず、岩盤の窪みに礫が堆積した状況である。集石遺構と2号土壙内の集石の角礫は破砕をうけた玄武岩のほぼ同じサイズの石材で同時期に堆積した遺構と推測される。

これらの遺構の性格であるが、主郭のある丘陵頂部は比較的大きな玄武岩の岩塊や露頭があり、石垣の石材を入手しやすい地域といえよう。前述したように現在の平場は刎木城当時のものではなく後世に削平されたものであり、削平時に岩塊が露出しそれをはずした跡が土壙状の落ち込みとして残ったと考えられる。比較的大きな角礫は現地で破砕した後石垣に利用するが、その他の小さな角礫は落ち込みを埋めるために利用されたのではないだろうか。また、その残存した角礫はひとところに集められて集石遺構となったと思われる。

遺構について総括すると、2ヶ所の石組遺構の検出から、この地が刎木城跡であるという確証をもつことができた。ただ、現存する主郭（平場）は削平され刎木城当時の遺構を残していない。また現存する石垣は明らかに後世に造成されたものであることが確認された。ただし、南側部分は刎木城跡の遺構が残存することが期待される。

3．遺　　物

(1) 貿易陶磁器（第14図）(註1)

貿易陶磁器としては、青磁・白磁・染付・陶器などが出土している。主郭部分から出土した遺物は造成等により撹乱を受けているためか細片が多く、形状や文様が判別できにくいものが多いが、可能な限り図化した。

1～6は龍泉窯系青磁である。1～3は碗口縁部、4は香炉口縁部、5は碗胴部、6は碗底部である。1は胴部が丸く張り出し、口縁端部が直口する形態で、口径は約12.8cm、外面の口縁下位に2条の沈線が見られる。2は大きく開く口縁部で若干内向する。3は口縁下位に1条の沈線を施す。4は口縁端部が内側に屈曲する形態である。5は内面に型押しの文様が施されるがその内容については不明である。6は底径約2.4cmで、形状は不明である。

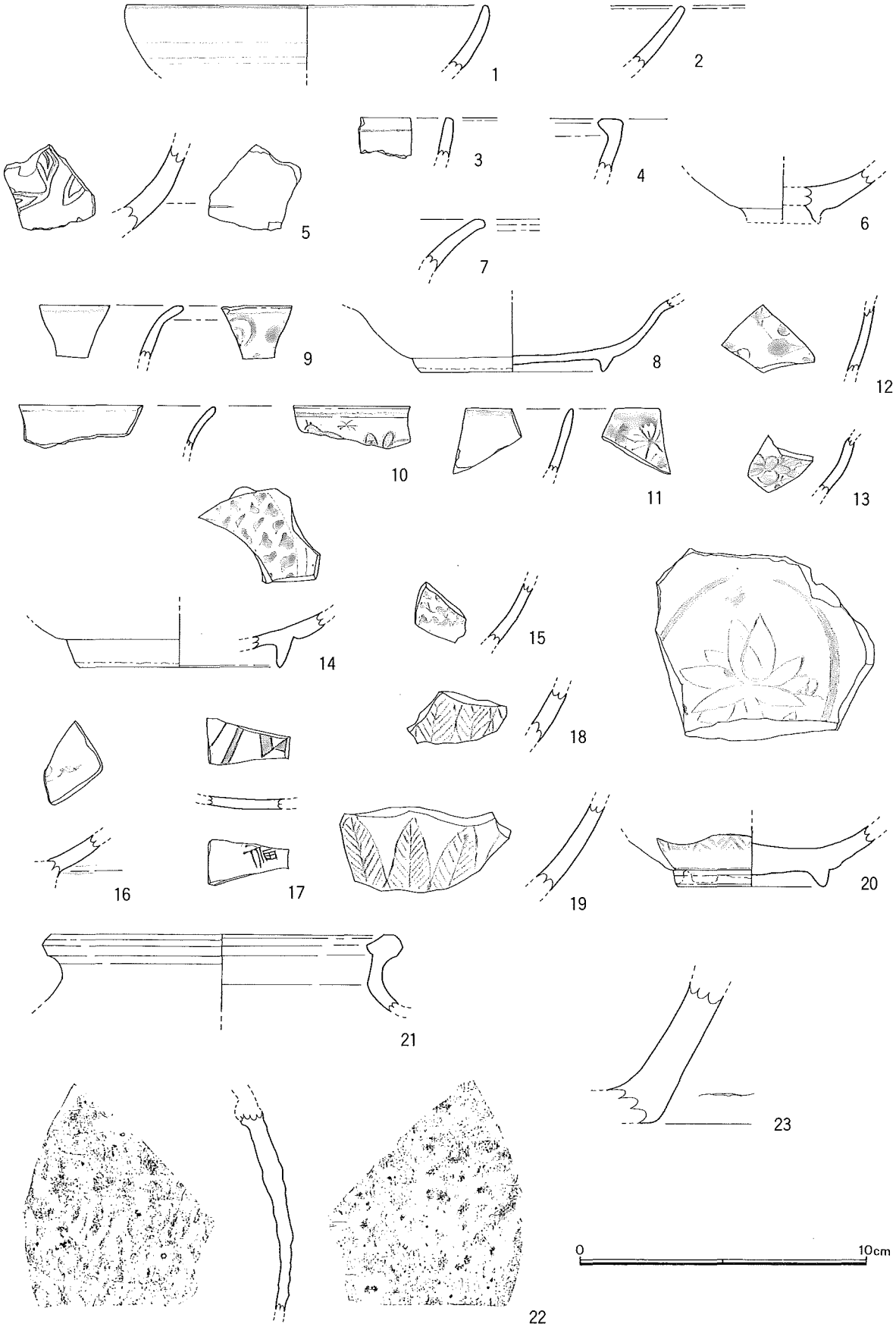
7・8は白磁である。7は口縁が大きく外反し、端部が丸く玉縁状におさめられている形態である。8は底径約6.4cmと口径にくらべ大きく、胴部から口縁にかけては丸く張り出し口縁端部にかけて大きく外反する形態である。全体的に器壁が薄く、高台も小さい。釉薬の色は乳白色であるがやや黄色味がかる。小野編年白磁皿C群に類する。

9～17は明代景徳鎮窯系染付の碗・皿類である。9・10は口縁端部が大きく外反する碗で、9は渦巻文、10は唐草文か、簡略された虫文がみられる。いずれも非常に発色の良いコバルト色を呈している。小野編年染付碗B群XI類に類する。11は花文が描かれている直行する碗口縁部。12・13は碗胴部であり、12は唐草文、13は草花文が描かれる。14は連子碗の底部である。底径は約6.8cmで、胴部から底部見込みにかけて直線的に下がる形態である。小野編年染付碗C群碗II類に属する。15・16は文様から連子碗の一部と思われる。17は皿底部であり、高台内部に「福」の文様が見られる。

18～20は中国南部福建省の青花碗で、外面の底部付近に芭蕉葉文、内面の見込みに蓮花の文様が見られる。生地土が灰色がかりコバルトの発色もわるいことから文様が不鮮明であったが、小野編年染付碗C群碗I類に特徴が類似する資料が確認された。2号石組遺構の内外から出土しており、時期決定の指標となっている。

21～23は陶器である。21は褐釉壺の口縁部で、口径は約11.2cmを測る。肩部から口縁部にかけては内弯し、口縁端部は玉縁状に肥厚する。22は褐釉壺の胴部で、器壁が薄く、胎土内に空気が入り瘤状の高まりが随所に見られる。朝鮮産船徳利か。21と同一個体の可能性もある。2号石組遺構の周辺から出土。23は褐釉壺の底部で中国産か。

形状のわかる少ない出土遺物から刎木城の繁栄の時期が推測される。古くは9・10の染付碗B群で15世紀後半、これは刎木城の南側丘陵にある志田三郎の墓にある石塔の銘「応仁三年」(1469) とほぼ同時期であり、刎木城の成立期と考えられる。最もピークの時期としては、8の白磁皿C群、14・20の染付碗C群で、16世紀前期から中葉に位置づけられ、刎木城の繁栄期がこの時期であることが推測される。ただし、これ以降の貿易陶磁器の出土はなく、後に説明する19世紀以降の国産陶磁器まで見られない。したがって、刎木城が15世紀末から16世紀中ごろまでのきわめて限られた時期に営まれた城郭であることが想定できる。



第14図　陶磁器(1)（貿易陶磁器）［1／2］

(2) **国産陶磁器**（第15～17図）(註2)

国産陶磁器はほとんどが19世紀前半から幕末にかけてのものであり、主に主郭部分から出土している。現存する平場が造成され利用された時期のものと推測される。形状・部位がわかるものに限って図化した（第15・16図）。

24～40は染付碗である。24は波佐見系のくらわんか茶碗で、外面に梅樹文が描かれている。25は外面に山水文、内面の口縁部に網目文が描かれる。若干口縁部が外反する形状である。26は丸碗口縁部で簡素な文様が見受けられる。27は丸文のある丸碗、28は二重網目文で口縁端部が玉縁状を呈する。29は外面に雪輪文、内面の口縁部に菱形の文様帯を配す。コバルトの発色は非常に良い。30は直線的に開口する口縁部で、外面に二重網目文を施す。31は口縁が外反する形状で、口径約7.4cm。器壁が薄く、外面に龍の文様を施す。32は器壁が非常に薄い渦巻文の口縁部。33は外面に魚、内面の口縁部に雷文帯を施す。34は生地が褐色を呈し、丸文を施す。35は底径約６cmの広東碗底部。36は深めの丸型碗底部、底径約3.6cm。37は染付丸碗の底部。底径約3.4cm。38は二重網目文底部、底径約5.7cm。39は胴部にやや丸目をもつ筒型碗、底径約3.0cmで若杉文か。40は無地の小型丸碗。器壁が薄く高台が非常に小さい。底径約2.8cm。

41は碗の蓋でつまみ部分が浅い形態。径約5.6cm。42は芙蓉手の小型鉢か。43は胴部から口縁部にかけて大きく外反する大型の染付鉢で、内面に大柄な図柄の山水文が描かれている。

44～52は染付皿である。44・45は底部から口縁にかけて短く丸く張り出す形状で、44は外面の文様のコバルトの発色は非常に良い。46・47は立ち上がりが比較的長めの皿。48～50は蛇の目釉剥ぎで、48は外面に二重網目文が見られる。底径は48が約5.5cm、50は約4.3cmである。51は花弁状口縁の形状で、コバルトの発色が強い。52は皿の見込み部分であり、文様不明。

53は直口する湯のみ形の碗か。外面にぼかしのある文様で口径約7.6cm、器壁が薄い。54は小型の壺頸部で、渦巻文が見られる。55は国産白磁の胴部で、胴下位は露胎が見られる。

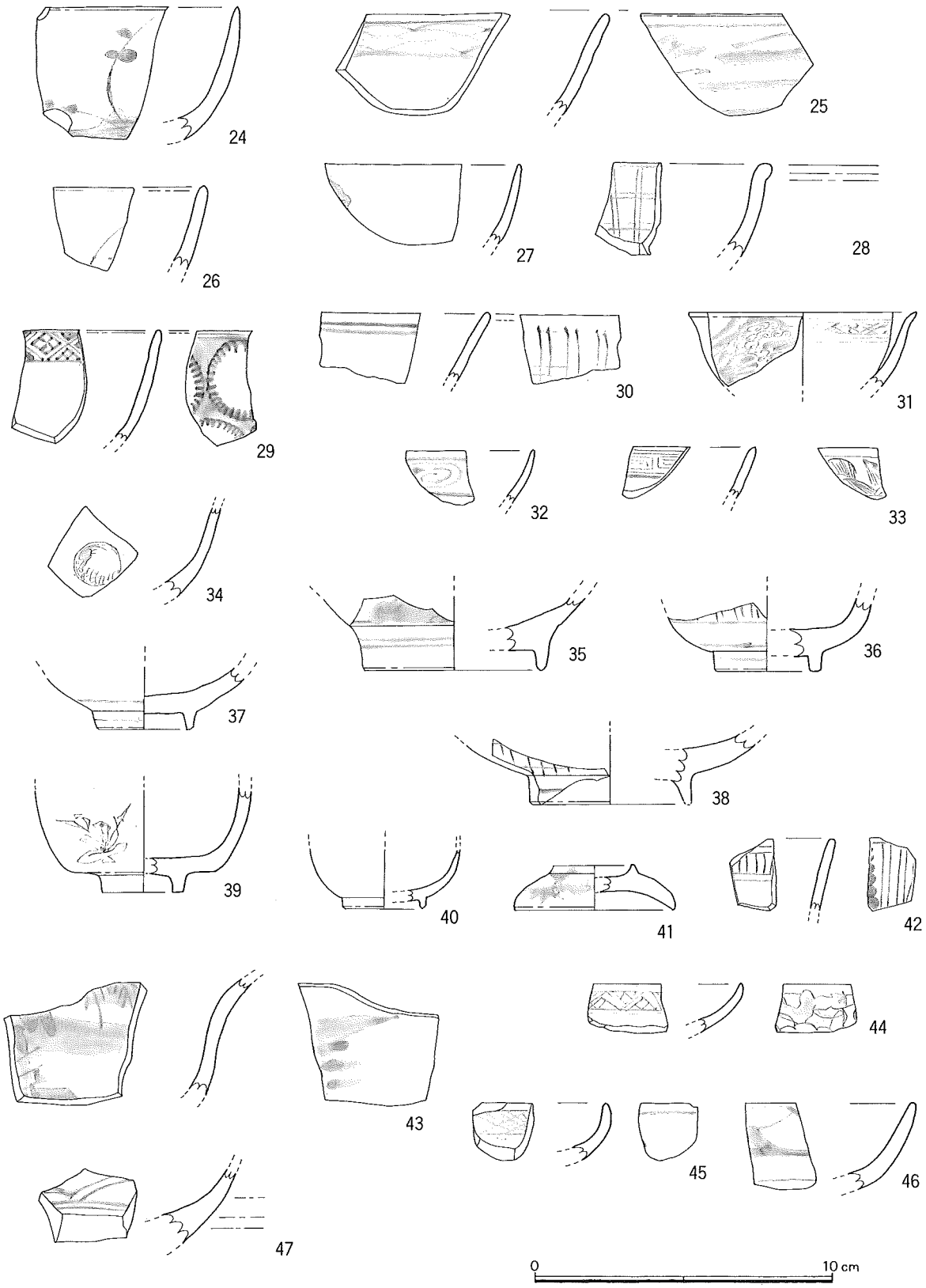
56～63は国産陶器・土器を一括した（第17図）

56は擂鉢口縁部、ただし擂目は釉薬によりほとんど見られない。胴部から口縁部にかけて直線的に開口し、口唇でさらに外行し上端に平坦部が作り出される形態である。赤褐色の胎土に暗赤褐色の釉薬がかかる。28・29は擂鉢胴部で直線的に開口する形態である。いずれも素焼きであり、外面には轆轤目が残る。明黄褐色を呈する。

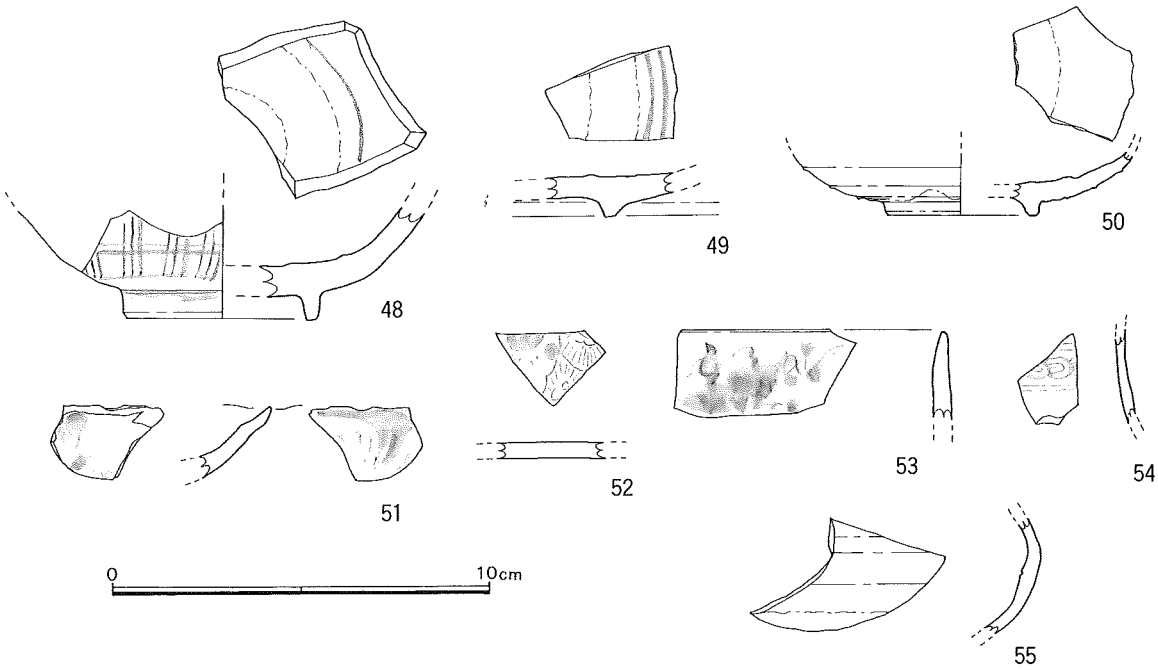
59は土瓶口縁部か。外面には緑がかった褐釉が施される。60は素焼きの壺口縁部か。口縁部内面にカキ目、外面はナデ調整の痕跡を残す。明赤褐色を呈する。61は鉄釉の壺胴部で、器壁が薄く、外面に二条の沈線が見られる。62は素焼きの蓋で外面の上端部のみに顕著な回転轆轤目が残る。

63は瓦質土器の大型鉢で、「奈良火鉢」の系統である。器壁が厚く、口縁部は欠損するが底径にくらべ胴部が短い形態が推測される。低い三角突帯を有し、胴部は若干丸く張り出す。底径は約30cmを図る。Ａ－２区１号石積遺構周辺からの出土である。

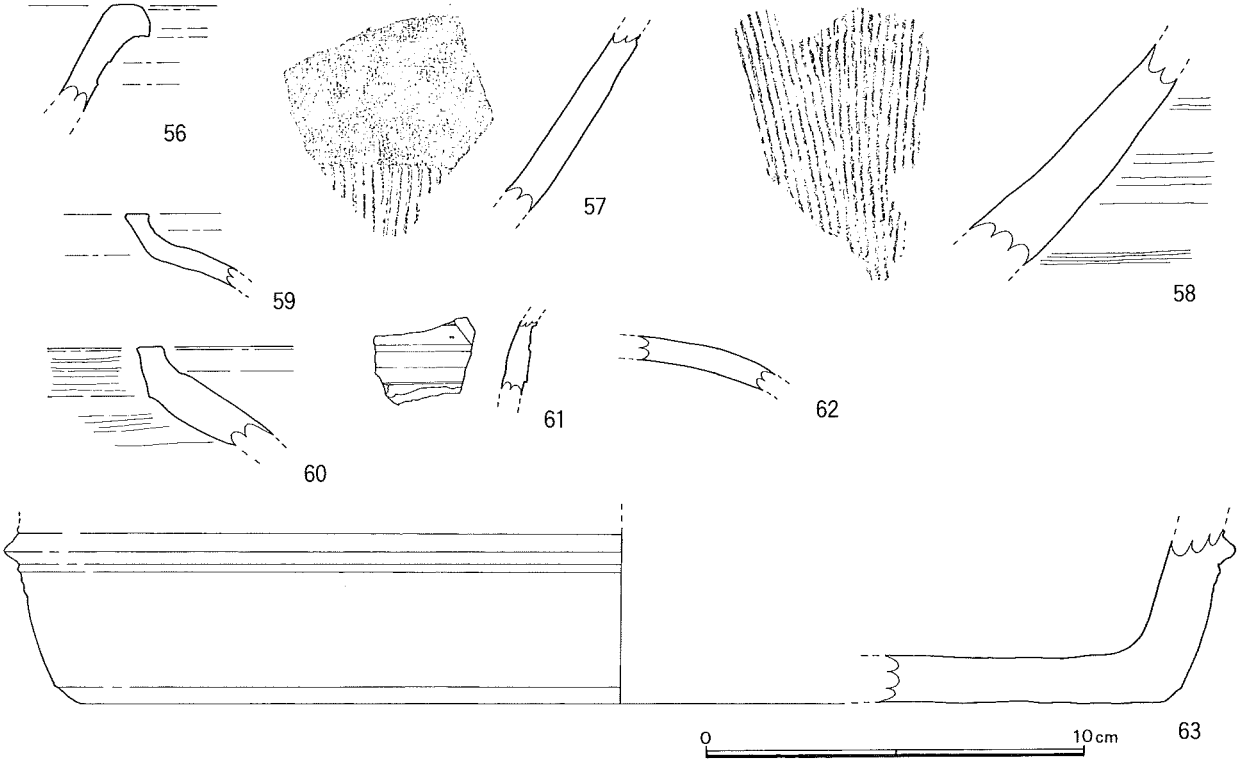
24の波佐見系丸碗が18世紀前半から中葉、28・30・38・48の二重網目文や35の広東碗などで18世紀末から19世紀半ば（幕末）の時代が比定され、現存する平場部分の時期決定となっている。また、63の瓦質土器鉢は15世紀後半から16世紀に比定でき、１号石組遺構が刎木城当時の遺構である根拠となっている。



第15図　陶磁器(2)（国産磁器①）［1／2］



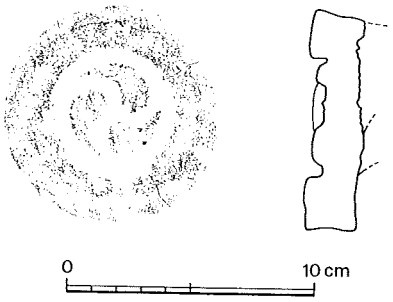
第16図　陶磁器(3)（国産磁器②）［1／2］



第17図　陶磁器(4)（国産陶器など）［1／2］

(3) **瓦**（第18図）

Ｃ－２区の柱穴内から出土した。柱穴内から出土した遺物はこの桟瓦のみであり、平場部分の遺構の時期を計る目安となっている。桟瓦は軒丸瓦部分の瓦当であり、左巻三巴文のみで珠文は見られない。瓦当の径は約8.8cm、外縁部が幅広くやや簡素なつくりである。裏面にはきざみの痕が残る。



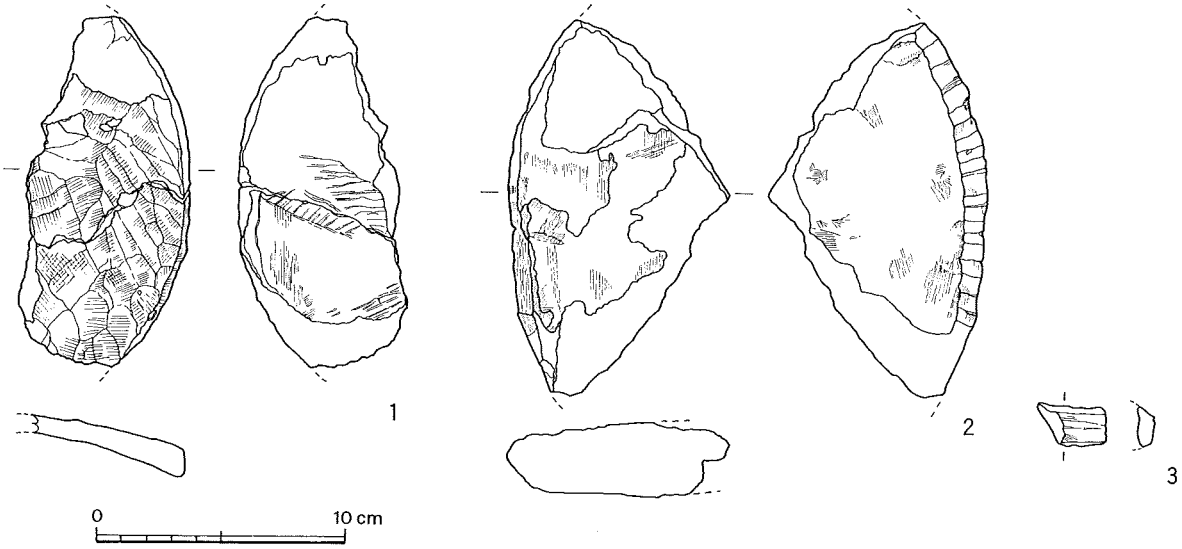
第18図　桟瓦［1/3］

その他の出土した瓦はいずれも平瓦の小片のみであり、時期の判断は難しい。Ａ－２区の平場造成土下の黒褐色土の中からの出土が最も多く、平場の造成が近世以降であることが判断される。

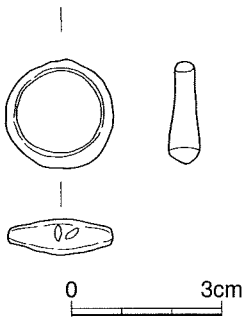
(4) **滑石製品**（第19図）

滑石は西彼半島の随所に確認され、刎木城跡においても耕作土中に摩滅された小片が多数出土している。ただし、遺跡周辺には滑石の露頭はなく持ち込まれた可能性が強い。滑石製品としてはＥ－１区２号石組遺構周辺のみからの出土である。

1は石鍋の蓋である。直径約18cmが推定され、４分の１程が残存している。外面には粗いノミの痕跡が顕著に残り、内面と輪郭はノミ加工の後に丁寧に仕上げられている。石材は薄い桃色かがった滑石素材であり、極めて良質である。**2**は石鍋を再加工した滑石製品と思われる。底部から胴部にかけて斜めに加工したノミ痕が明確に残るため、もともと石鍋として製作されたものであるが、その後底の部分を残し立ち上がり部分は平坦に削り上げられている。直径約20cm程度、５分の１程を残す。**3**は石鍋の鍔である。断面は台形を呈し、下に当たる部分には煤の付着が見られる。



第19図　滑石製品［1/3］



第20図　指輪［2/3］

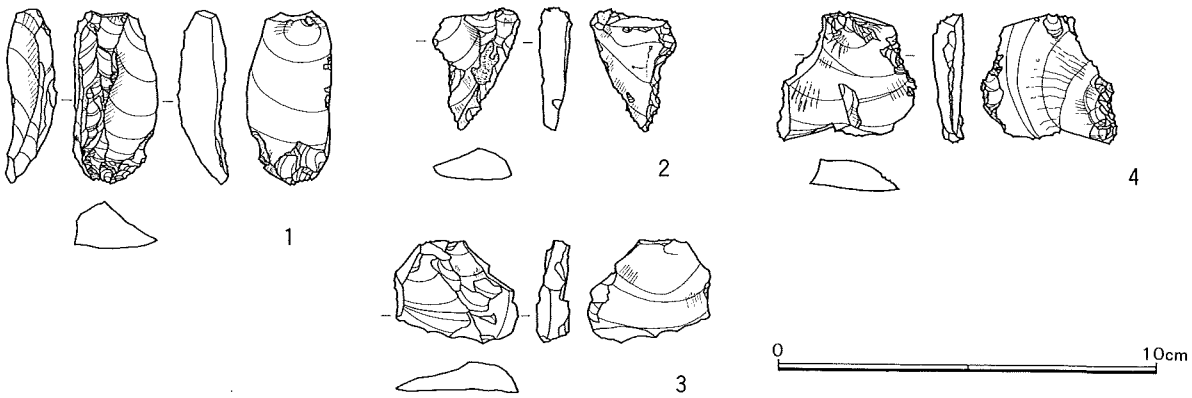
(5) 指　　輪（第20図）

指輪は、A－2区の3層黒褐色土から出土した。径は約2㎝で、幅は0.3㎝、正面に当たる部分は幅広となり約0.4㎝を測る。断面形は外に丸く張り出し、内側は平坦な半円形である。正面の部分には2枚の花弁状の文様を見ることができ、その中は金色の着色がある。素材は白銅製か。指輪は元来キリシタン遺物として織豊期に搬入したといわれるが、一般的に普及したのは江戸時代後期ごろに白銅製のものが中国から伝播したといわれており、この製品はこの頃のものと考えられる。

(6) 石　　器（第21図）

石器は合計20点あまりが出土している。腰岳産の黒曜石をはじめ、大崎半島産、針尾産など見受けられる。刎木城跡周辺には石器の散布が見られることから、周囲に遺物包含層が存在することが推測されるが、今回の調査区の中では確認されなかった。出土した石器のうち加工の痕跡があるもの4点について図化した。

1は漆黒色の黒曜石を石材とする加工痕のある縦長剥片である。長さ4.5㎝、最大幅2.3㎝、厚さ1.2㎝を図る。上面からの敲打により剥離された縦長剥片の長軸の下側端部に調整を施し刃部を形成している。**2**は漆黒色の黒曜石製で、三角形の剥片を素材とする加工痕のある剥片である。正面の右側に連続した調整を施し直線的な刃部の形成を行っている。長さ約3.2㎝、幅約2.2㎝、厚さ0.7㎝を測る。**3**は青灰色黒曜石を使用した横長剥片で部分的に調整痕が観察される。長さ約2.7㎝、幅約3.3㎝、厚さ約0.8㎝を測る。**4**は漆黒色黒曜石の横長剥片で、正面の左側に連続した加工痕が観察される。長さ約3.2㎝、幅約3.3㎝、厚さ約0.7㎝を測る。



第21図　石器［1/2］

（註1）貿易陶磁器の産地・年代については、長崎県教育庁学芸文化課 川口洋平氏からご教示いただき、小野正敏ほか「14～16世紀の日本出土貿易陶磁の編年」『貿易陶磁研究 No. 2』1982を参照した。

（註2）宮崎貴夫ほか「万才町遺跡」『長崎県文化財調査報告書第123集』1995
川口洋平ほか「長崎奉行所跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡」『長崎県文化財調査報告書第183集』2005
大橋康二ほか「日本のこころ　古伊万里」『別冊太陽』1994などを参照した。

Ⅳ　ま　と　め　～刎木城跡の所在とその後の変遷～

刎木城跡の所在

今回の調査の目的の一つに刎木城跡の所在の確認があった。現存する平場と石垣が果たして当時のものなのか。『大村郷村記』に記録されている「刎木の古城」が果たしてこの場所なのか。

本文でも述べたごとく、『大村郷村記』に記録されている主郭の広さや石垣の高さは調査前に存在した平場や石垣の規模とほぼ同じである。つまり江戸時代後期ごろに書かれた『大村郷村記』の記録が、刎木城跡本来の形状を現しているものなのか、すでに改変された姿を現しているのかというところがポイントとなる。

現存する遺構について北側から外観すると、正面に石垣が切り立ちその上に平坦な主郭が形成されており、織豊期の城館の面影を現しているといえよう。ただし、主郭の南側に行くにつれて地形が傾斜しており平場の形成としては不十分である。また石垣の積み方についても破砕された角礫が多く用いられており、石垣の間に隙間があることから粗雑な様相を示している。

今回の調査では、現存する石垣と平場が江戸時代後期（19世紀後半）以降の遺構であることが明らかとなった。したがって郷村記の記録が書かれた時期以降の遺構ということになる。ただ、石垣の下からは15世紀後半から16世紀半ばごろの石組遺構や出土遺物が確認された。Ｅ－１区の調査区から検出された石組遺構は明らかに現存する石垣の下に築かれ、さらに規模は小さいものの野面積みの石の積み上げが確認されている。石組の周辺からは貝殻の分布が発見されたことも遺構の真実性を高めた根拠となった。

これらのことから判断するとこの地に刎木城が存在したことは間違いない。時期についても志田三郎の墓周辺に散在した石塔の年号、応仁３（1469）年と出土遺物の時期に相応する。ただし、残念ながら現在刎木城の当時の面影は見ることができない。

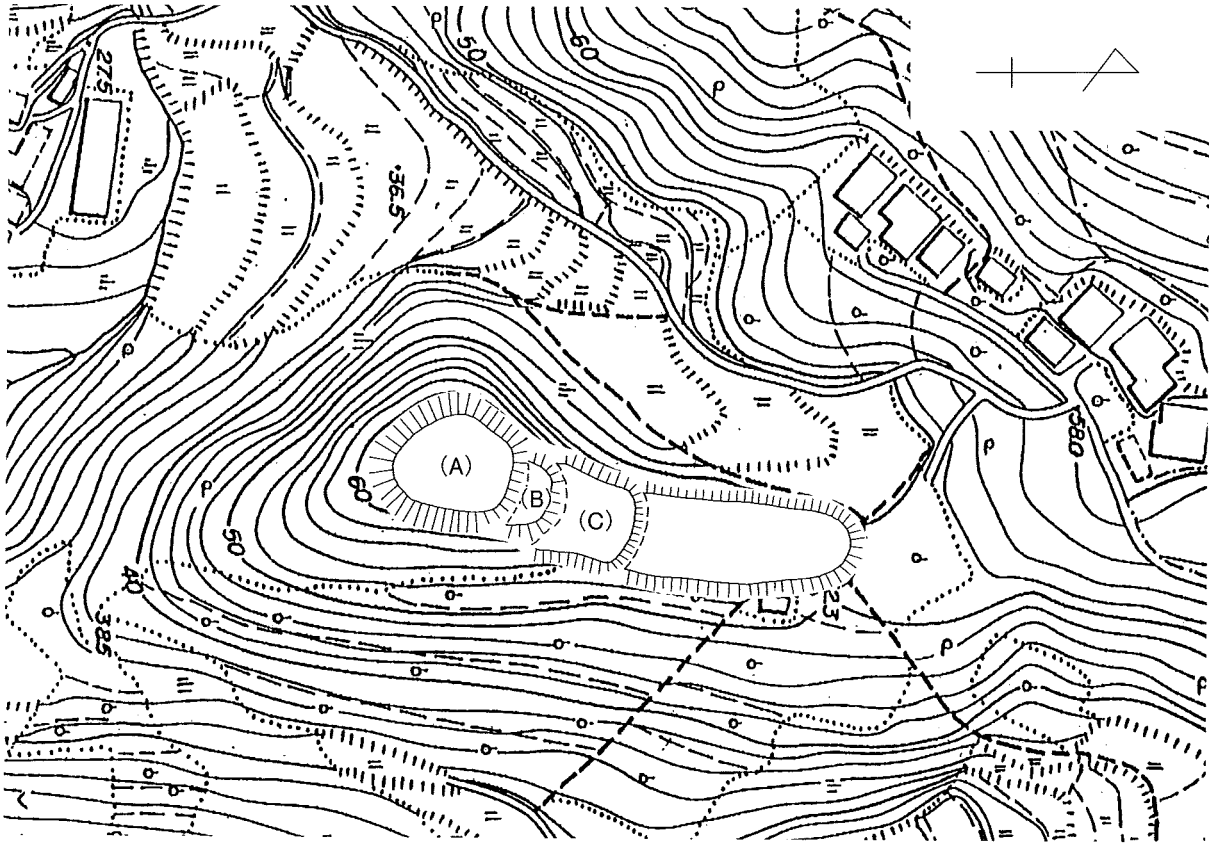
刎木城跡の形状とその後の変遷

刎木城跡が営まれた時期は出土した遺物から推測すると、15世紀末から16世紀半ばまでの極めて短期間であったといえる。刎木城はどのような形状だったのか、またどのような変遷をたどったのか、今回の調査ではその成果をえることができた。

前述するごとくこの地に刎木城が存在したことは明らかである。それでは当時はどのような形状であったのか。実見できない今、推測の域を脱することはできないが、調査成果から想定できることをまとめてみる（第22図）。

主郭(A)は広範囲ではないものの丘陵の頂部に存在したことは間違いない。主郭からの眺望は大村湾の遠方まで望むことができ、交通路の監視や防御的な機能は備えられていたと言えよう。主郭の周囲に石垣が築かれていたことは不明である。ただし遺跡周辺に玄武岩の岩塊があまり存在しないこと、現存する石垣の石材が割れた石が多いこと、主郭部分に破砕された角礫の集石があることなどから考えると、元来刎木城にあった石垣の石材を加工して現存する石垣に再利用したという仮説はどうであろうか。

主郭の北側には腰郭状の平場(B)があったことが判明した。柱穴があることがその根拠といえる。またその縁辺に石組遺構があった。Ｅ－１区調査区と同じく貝の分布が見られる。さらに北側には現在



第22図　刎木城跡縄張り図［1/2,000］

は宅地となり掘削されているが、舌状の丘陵があることから複郭（二の郭）(C)があったことが想定できる。このことは宅地造成前に佐世保市の郷土史家山鹿敏紀氏が現地を訪れたときに遺構の存在を確認しており縄張り図を作成している(註1)。山鹿氏はさらに北側に空堀を想定している。現在はみかん畑に至る里道になっており、旧状を残していない。

その後の刎木城はどのように変遷し、現在の形状となったのだろうか。

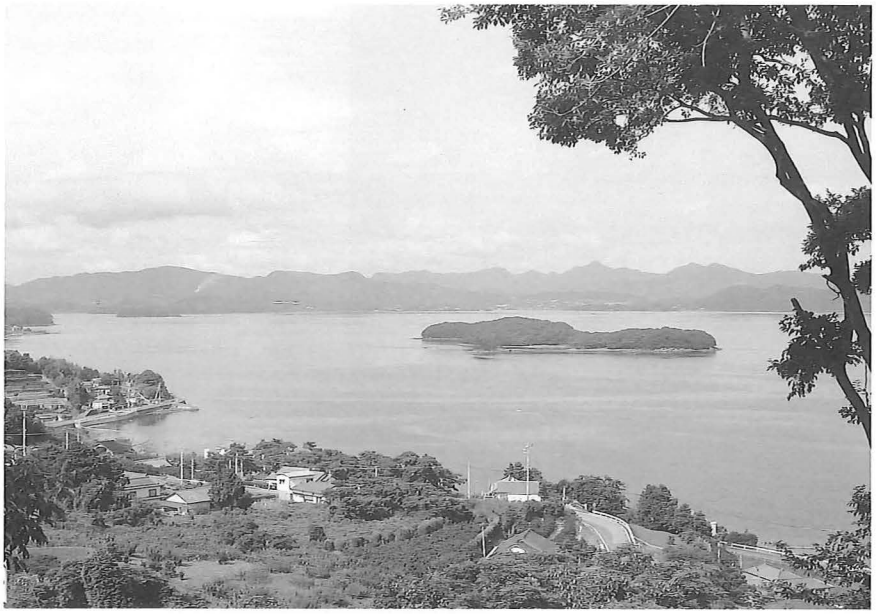
『大村郷村記』では当時、畑として利用されており、中央に1.8m四方の塚があり城館の名残を残しているという記述がある。現在の平場には塚を見ることができない。調査の成果から現在の平場は後世の造成により形成されていることがわかっており造成土の中には玄武岩の角礫が多数混在している。つまり、刎木城跡の主郭部分を掘削・削平して平場をつくり出したことがうかがわれる。平場の中央付近にある土壙は削平の際に露出した岩塊を掘り出した痕跡ではないだろうか。この造成の目的はおそらく大型建物を構築することであり、その根拠が平場で検出される柱穴である。数々の資料を調査してみたが、この地にどのような建物が建っていたかの記録は見つからなかった。柱の大きさから考えて一般的な住宅とは考えられず疑問が残っている。

今回の工事で主郭西側は残念ながら掘削されることとなった。ただ、南西側については石組遺構をはじめ、刎木城跡の遺構が残存する可能性が非常に高い。今後、周辺の調査が実施できる機会があれば是非解明して欲しいと念願する。

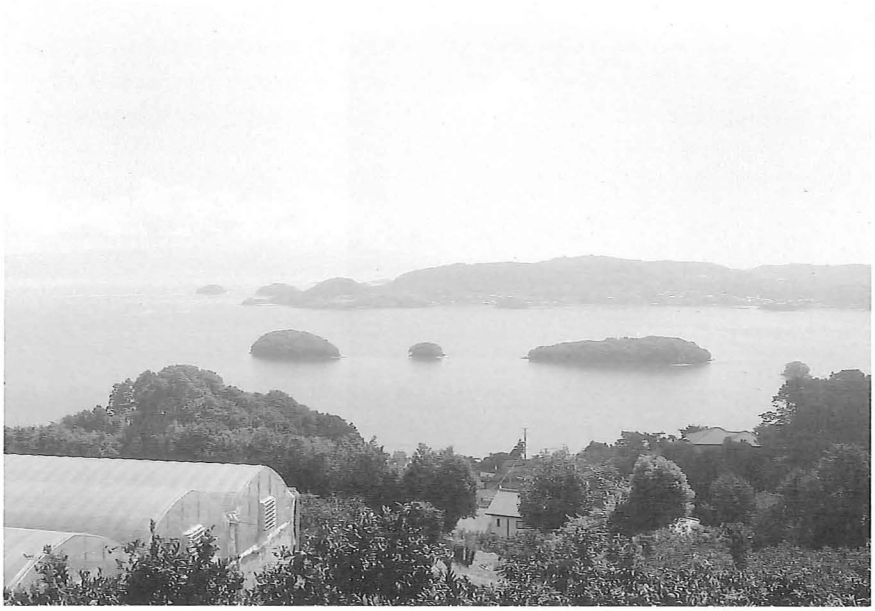
（註１）山鹿敏紀「郷土研究」第16号　佐世保市郷土研究所　1987

写　真　図　版

刎木城跡近景



刎木城跡から大村湾を望む



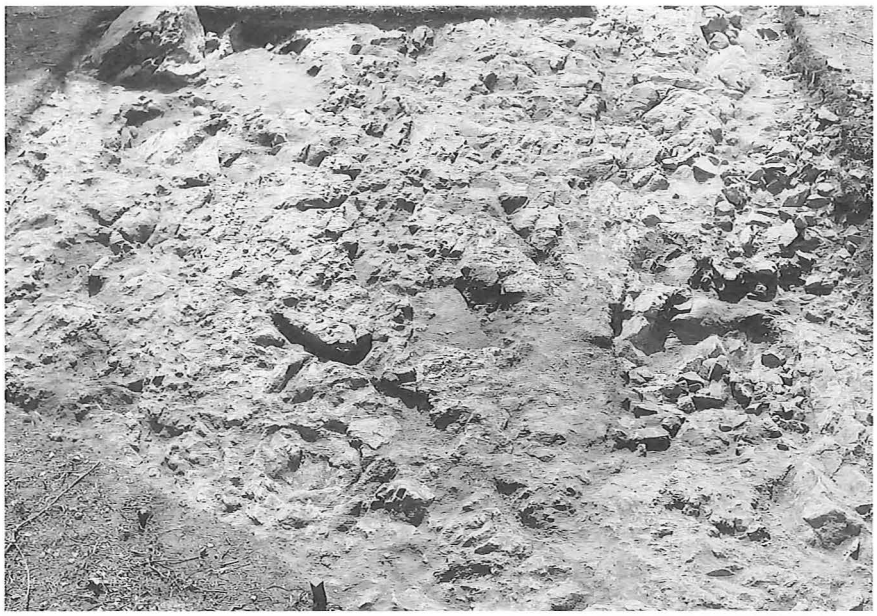
刎木城跡と白崎半島を望む

図版 2

刎木城跡北東側石垣

刎木城跡北西側石垣

刎木城跡北側石垣断面状況



刎木城跡主郭遺構検出状況

刎木城跡主郭柱穴検出状況

柱穴内瓦出土状況

図版 4

刎木城跡腰部柱穴検出状況

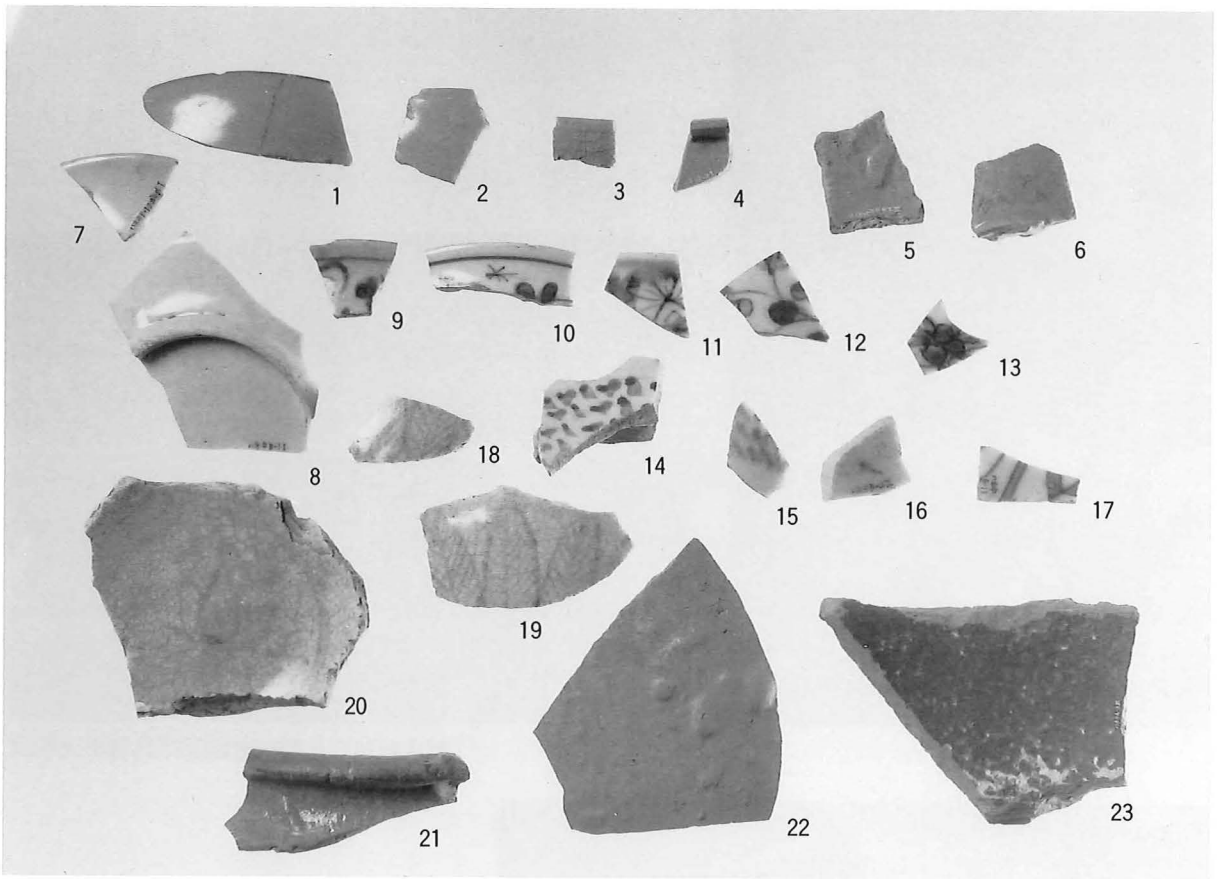
刎木城跡 1 号石組遺構①

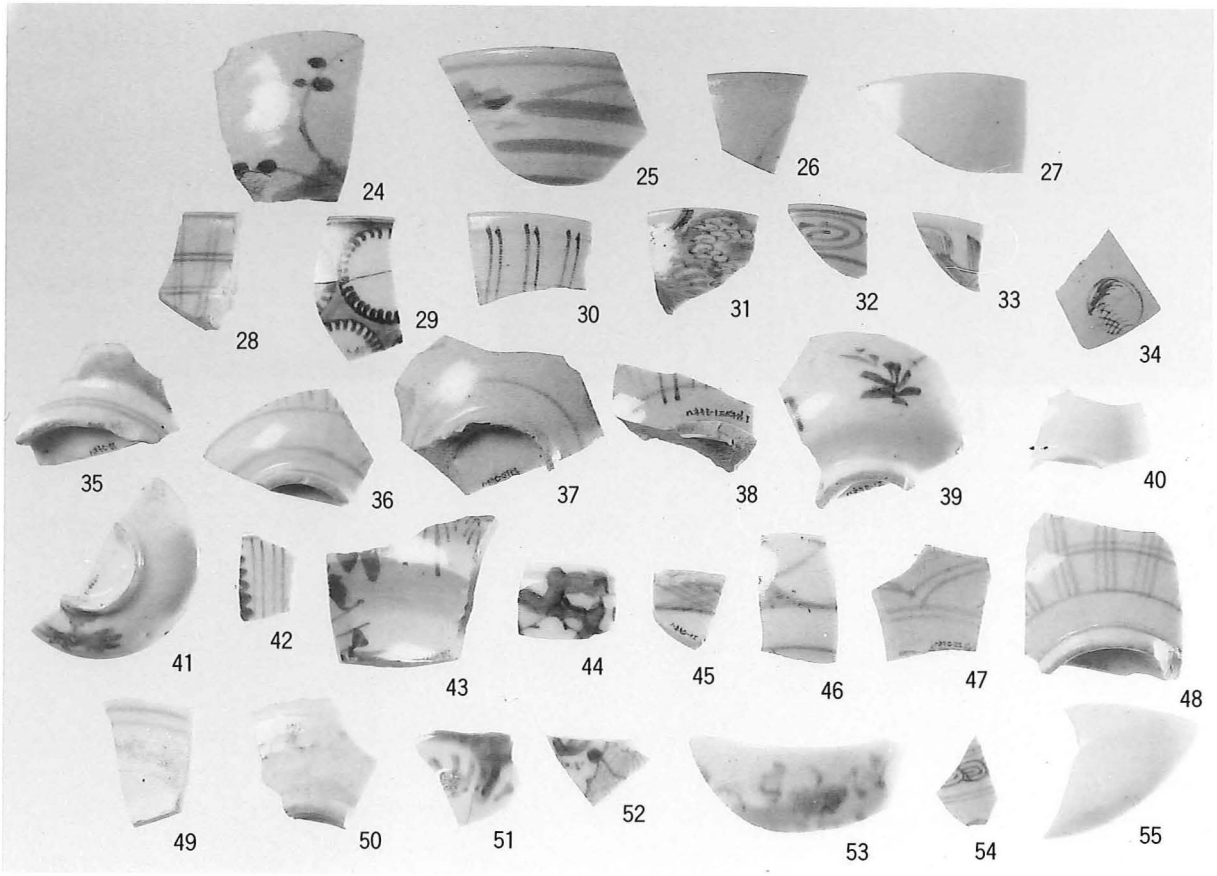
刎木城跡 1 号石組遺構②

刎木城跡 2 号石組遺構及び貝層出土状況

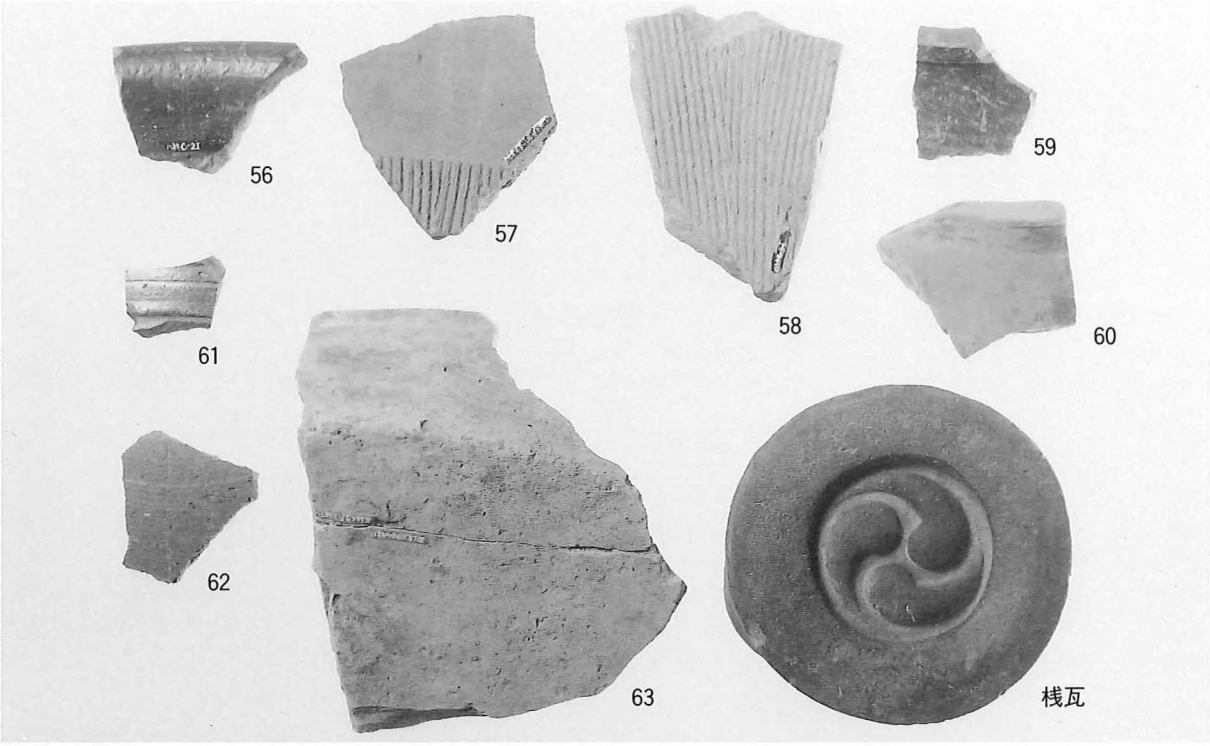
2 号石組遺構周辺遺物出土状況

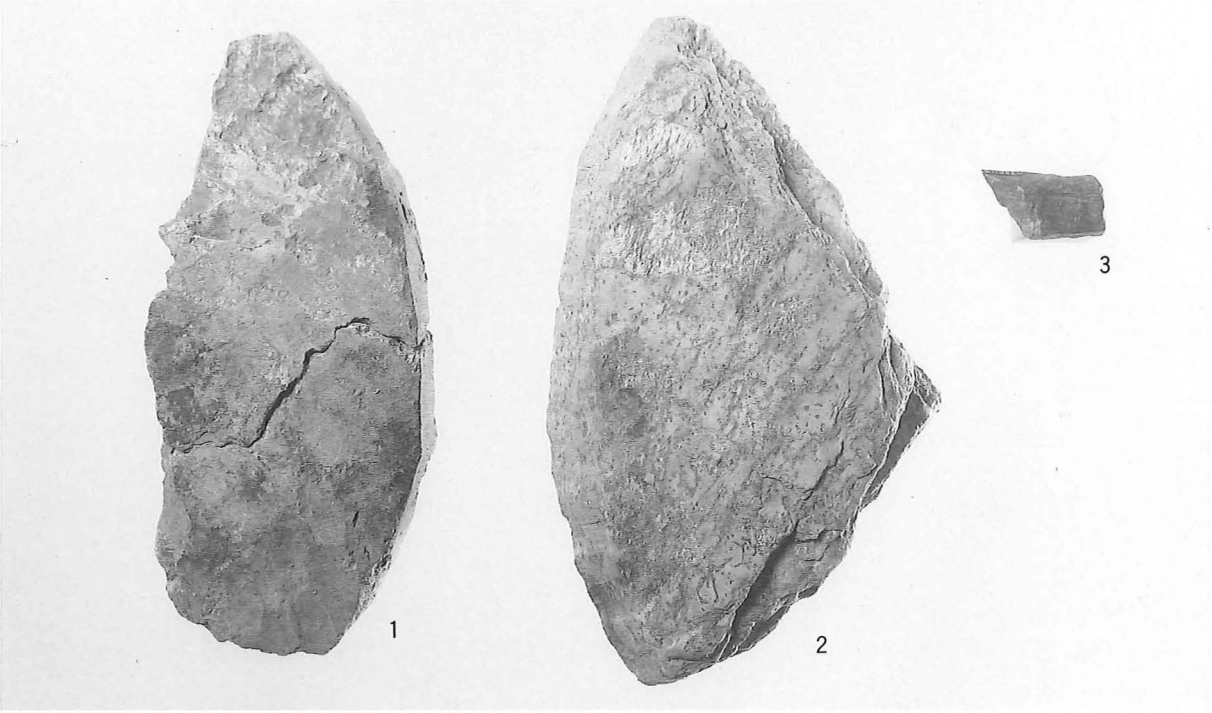
図版 6

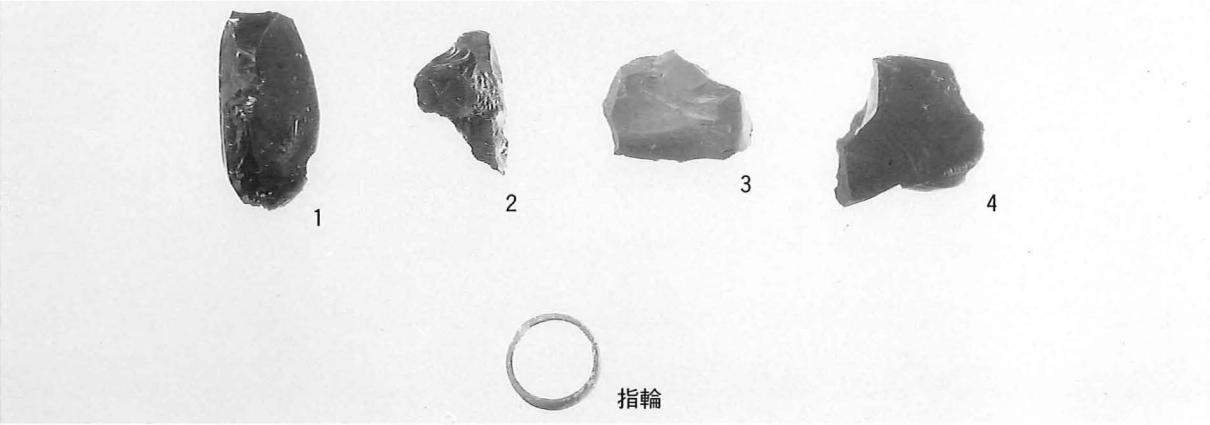

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23


24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55

出土遺物①







出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	はねきじょうあと
書名	刎木城跡
副書名	一般国道206号道路改良工事(小迎バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第197集
編著者名	寺田正剛
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎県長崎市江戸町２番13号　TEL095－824－1111
発行年月日	西暦2008年３月31日

所収遺跡名(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
刎木城跡(はねきじょうあと)	長崎県(ながさきけん) 西海市(さいかいし) 西彼町(せいひちょう) 八木原郷(やきはらごう)	18-36	70-71	33° 1′ 25″	129° 44′ 9″	20070702 ～ 20070921	384m²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
刎木城跡	城館跡	室町時代 ～ 江戸時代	石垣 石組遺構 柱穴 土壙 集石	貿易陶磁器 国産陶磁器 滑石製品 石器	

長崎県文化財調査報告書　第197集

一般国道206号道路改良工事（小迎バイパス）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

刎　木　城　跡

平成20年３月31日発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
☎095－824－1111

印刷所　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007-２
☎0957－22－6000